

貝殻集積からみた先史時代の貝交易

2018年度の炭素14年代測定結果をもとに

Reconstruction of Neolithic Shell Trade Based on Radiocarbon
Data from Shell Deposits in the Okinawa Islands, FY2018

木下尚子

KINOSHITA Naoko

はじめに

①問題の所在と研究の意味

②貝殻集積研究のあゆみ

③貝殻集積の年代測定結果

④貝殻提供地からみた貝交易の動向

結語－まとめと今後に向けて－

【論文要旨】

本論は、科研費共同研究の一環としておこなった貝殻の炭素14年代測定結果（較正年代）にもとづく考古学的考察である。沖縄諸島の先史時代遺跡に残る大型巻貝（ゴホウラ・イモガイ）の集積を対象に、16遺跡で検出された弥生時代併行期の貝殻集積27基のうちから、ゴホウラとイモガイの貝殻合計51個を選んで測定し、結果を整理してその歴史的意义を示した。

貝殻集積は北部九州と沖縄諸島間の貝殻の交易（貝交易）に伴う諸行為によって、貝殻産地に残されたものである。考察では、上記年代値に、貝殻消費地である北部九州の弥生遺跡に残るゴホウラ・イモガイ腕輪の時期を加えて比較した。この値は、すでに公表されている貝輪着装人骨を含む弥生人骨の炭素14年代を介して確定したものである。こうして導いた較正年代67例をもとに、1200kmの海域をはさんだ産地と消費地間の時間的関係を整理し、弥生時代から古墳時代にわたる貝交易の動向を以下の6群に分けて述べた。以下の（）内は確率分布曲線のピーク位置を示す。

・A群（501 cal BC 以前）：西北九州沿岸部の支石墓人によって沖縄諸島と九州間の貝交易が始まる時期。弥生早期から前期中葉の時期に対応する。

・B群（500～201 cal BC）：北部九州平野部の弥生人によるゴホウラ類・イモガイ類の貝殻消費が始まり、複数種類の貝輪に対応した形の貝輪粗加工品が沖縄から輸出される時期。弥生前期後葉から中期中葉に対応する。

・C群（200 cal BC～1 cal BC）：弥生社会のゴホウラ類・イモガイ類の消費数が最大になり、沖縄でのゴホウラ確保に行き詰まりの兆候が見え始める時期。弥生中期後半に対応する。

・D群（1 cal BC/cal AD1 をまたぐ）：九州での貝殻需要が衰退し貝交易が収束する時期。弥生中期末から後期初頭に対応する。

・E群（cal AD301～cal AD500）：消費地が短期間のうちにヤマト王権の畿内から九州へと移り、一方で種子島広田集落において沖縄との交易関係が深まる時期。

・F群（cal AD501以降）：貝交易の第二のピークに対応する。

貝交易の動向を、絶対年代を対応させて示した点が本論の特徴である。

【キーワード】 貝殻集積、炭素14年代、沖縄諸島、九州、貝交易、貝塚時代、弥生時代貝塚時代

はじめに

本稿は、沖縄諸島に残る貝殻の集積遺構を対象に、貝殻の炭素14年代を測定して、先史時代の貝交易の実態を論じるものである。貝殻の年代測定は、「考古学データによるヤボネシア人の歴史の解明」(2018～2022年、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「ゲノム配列を核としたヤボネシア人の起源と成立の解明」領域代表斎藤成也、B01班代表：藤尾慎一郎)による共同研究の一環としておこなったもので、2018年度に沖縄諸島の16遺跡、貝殻集積27基を選んで、51個の貝殻を測定した。年代の測定は坂本稔氏、瀧上舞氏が担当し、その成果は国立歴史民俗博物館研究報告第219集に掲載されている[藤尾ほか2020]。共同研究は現在も進行中であるが、ここではこれまでに得られた情報を整理し、その考古学的意味を検討して後半の共同研究に繋げようとするものである。

I 問題の所在と研究の意味

貝殻集積とは、琉球列島産の大型巻貝であるゴホウラ類(ゴホウラ、アツソデガイ)とイモガイ類(アンボンクロザメ、クロフモドキ等)⁽¹⁾を集めた遺構をさす(写真1、図1)。遺跡では、浅い凹みの中に10個前後の貝殻が雑然と集まっていることが多いが、中には100個以上が整然と積まれた例もある。集積はゴホウラだけ、イモガイだけのものもあれば、双方混在するものもある。これらの集積は、すべて貝塚時代後期⁽²⁾(以下「貝塚後期」)前半の海岸砂丘上に残されており、この時期の遺跡では普通にみられる遺構である。ただ貝殻集積が残るのは琉球列島内でも沖縄諸島に限られ、北の奄美群島にも、南の先島諸島にもない。貝殻集積は、沖縄諸島に特有の遺構といってよい(図2)。



写真1 ゴホウラとイモガイの集積
(浦添市嘉門貝塚B-13号貝殻集積)
[松川編1993：図版23引用]

貝殻集積が残された貝塚後期前半は、九州の弥生時代前期から古墳時代中期にほぼ対応している。貝殻集積を伴う遺跡にはしばしば九州の弥生土器が伴い、ときにガラス小玉や銅鏃、鉄斧、銅鏡破片等弥生文化と共通する遺物や、貝符など種子島の広田遺跡⁽³⁾と共通する貝製品が出土する。集積された貝殻には、しばしば相互に類似した打ち欠きや穿孔のあるゴホウラ加工品が混在する。その形状にはいくつかのパターンがあり、それぞれ九州弥生人、同古墳人、種子島広田人が使用した腕輪の形に近いことから、貝殻集積は沖縄貝塚人と九州弥生人との間で行われた貝殻の交易(以下「貝交易」)にかかわる遺構だと理解されている。腕輪製作の準備のためにあらかじめ加工された貝殻を筆者は貝輪粗加工品・貝輪素材⁽⁴⁾とよんでいる。

このように、貝殻集積が貝交易の重要な証左であることに疑いはないが、土器を伴う貝殻集積は限られており、その帰属時期の絞り込みは容易でない。貝殻集積が残されている海岸砂丘は、砂の

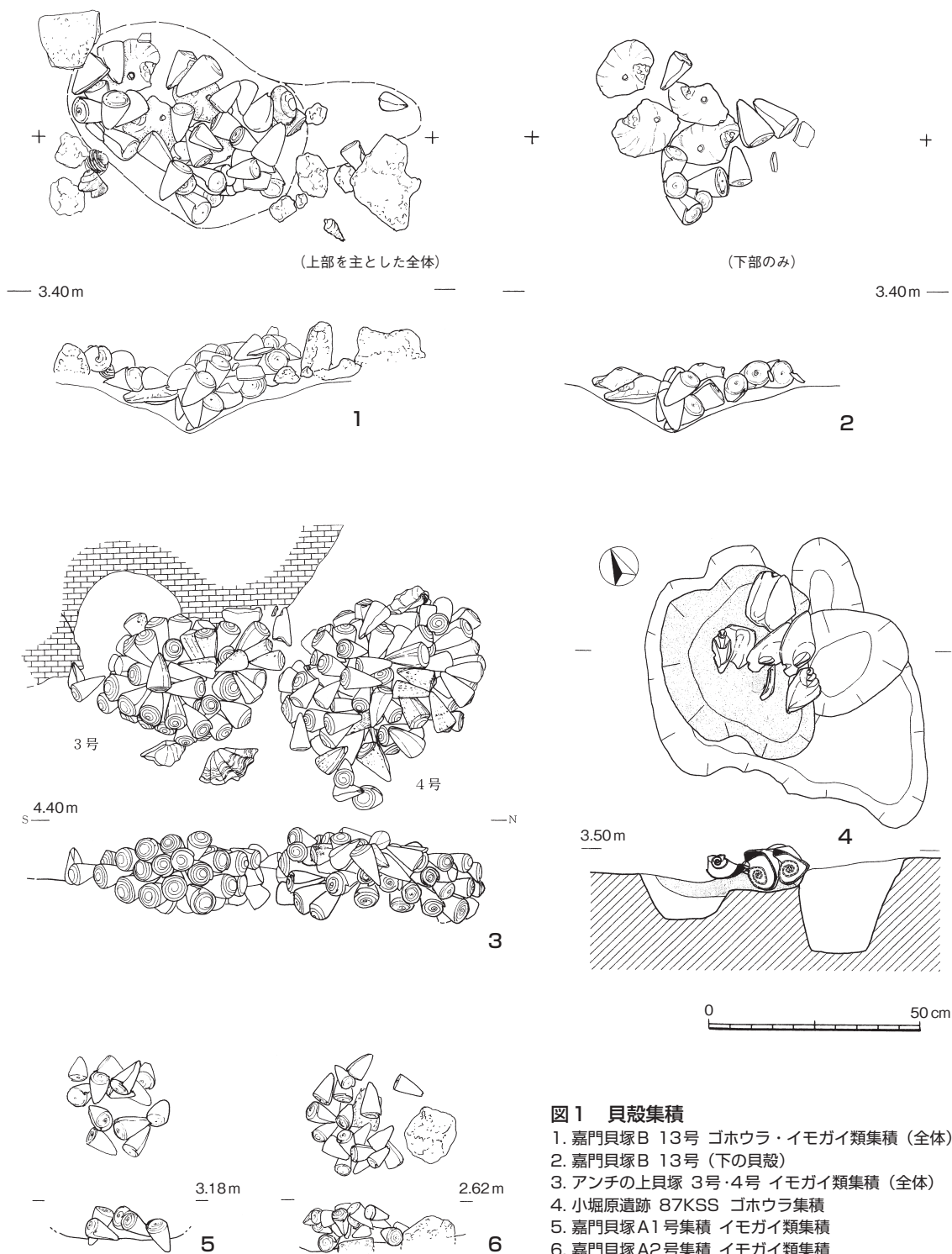
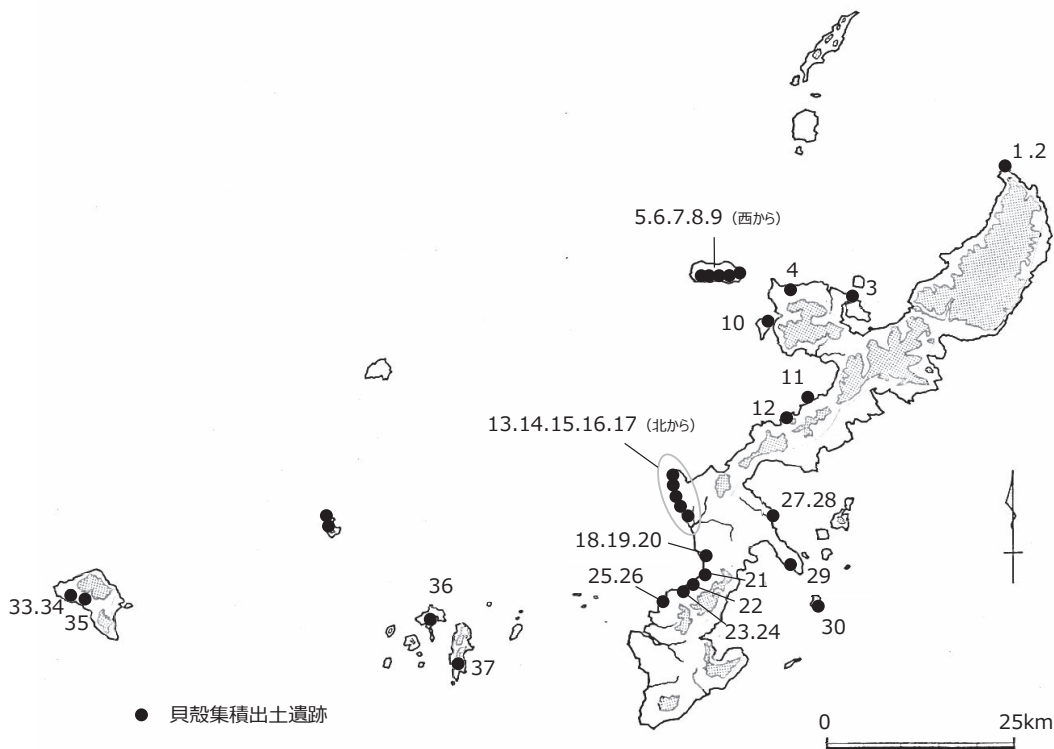


図1 貝殻集積

1. 嘉門貝塚B 13号 ゴホウラ・イモガイ類集積 (全体)
2. 嘉門貝塚B 13号 (下の貝殻)
3. アンチの上貝塚 3号・4号 イモガイ類集積 (全体)
4. 小堀原遺跡 87KSS ゴホウラ集積
5. 嘉門貝塚A1号集積 イモガイ類集積
6. 嘉門貝塚A2号集積 イモガイ類集積



1 宇佐浜B貝塚	11 部瀬名貝塚	21 宇地泊兼久原第一貝塚	31 西底原貝塚B地点
2 宇佐浜貝塚	12 熱田第2貝塚	②② 新城下原第二遺跡	32 渡名喜島大道原
3 大堂原貝塚Ⅲ層	13 浜屋原貝塚A地点	23 安座間原第1遺跡	33 大原貝塚A地点
4 具志堅貝塚	⑭ 大久保原貝塚	24 安座間原第2遺跡	34 大原第2貝塚
5 ナガラ原西貝塚	⑮ 中川原貝塚	②⑤ 嘉門貝塚B	35 清水貝塚
⑥ 具志原貝塚	⑮ 片江原遺跡	②⑥ 嘉門貝塚A	36 古座間味貝塚Ⅲ区
7 阿良第二貝塚	⑮ 木綿原遺跡	②⑦ 宇堅貝塚A地点	37 阿波連浦貝塚
8 阿良貝塚	⑮ 伊礼原D遺跡	28 宇堅貝塚A地点	
9 浜崎貝塚Ⅰ区	⑮ 伊礼原遺跡	②⑨ 平敷屋トウバル遺跡	○印番号は貝殻の年代測定をおこなった遺跡
10 アンチの上貝塚	20 小堀原遺跡	③⑩ 津堅貝塚	

図2 沖縄諸島における貝殻集積出土遺跡の分布

堆積と飛翔が頻繁であることから、結果的に同じ文化層内に複数型式の土器が近接して残されることになり、どの型式が貝殻集積に対応するのかを決めることがきわめて困難だからである。筆者はかつて、集積に含まれる定型化した輸出用の加工貝殻－貝輪素材あるいは貝輪粗加工品－と、これに対応する九州のゴホウラ腕輪の型式、ならびに貝殻集積を含む地点と遺物包含層で主体的な土器の型式の整合性を根拠に貝殻集積の時期を絞り、貝殻産出地からみた交易の大枠を示したが、議論の対象は限られており、交易の実態に迫るにはなお距離があった〔木下2017〕。今回の貝殻集積内貝殻の年代測定は、こうした限界を超え、貝殻の年代を測定したすべての遺構に、確率による同一基準の数値年代を与えるものである。⁽⁵⁾

Ⅱ 貝殻集積研究のあゆみ

貝殻集積が最初に発見されたのは、沖縄国際大学考古学研究会による1975年の浜屋原貝塚（読谷村）A地点の発掘調査である。その後木綿原遺跡（読谷村）、ナガラ原西貝塚（伊江村）、熱田第二貝塚（恩納村）で同様の発見が続いたが、当初はこれらと自然遺物との区別が必ずしも明確ではなく、遺構としての評価はやや曖昧であった。当時は九州の弥生文化が沖縄にどのような影響を与えたのかが研究者共通の関心事であったことから、弥生土器を伴う遺跡でしばしば見つかる貝殻集積にも、同様の意識で注意が向けられるようになった。阿良貝塚（伊江島）の発掘調査で複数個の定型的なゴホウラ粗加工品を検出した安里嗣淳氏は、貝殻集積のゴホウラの多くは貝輪製作の中途の工程を示す半製品で、これらは弥生人による腕輪製作の成功度（完成品の歩留り）を高めるために準備されたものとする考えを示した〔安里1983：p.46〕。貝殻集積が貝交易の脈絡で認識された第一歩である。これによってゴホウラだけではなく未加工のイモガイによる集積にも関心が注がれるようになる。

1985年、岸本義彦氏と島弘氏はゴホウラとイモガイの貝殻集積13遺跡23基を集成し、考古学的な検討を行った。その結果、貝殻集積にはゴホウラ類だけのもの、ゴホウラ類とイモガイ類が混在するもの、イモガイ類だけのものがあること、これらが貝交易のためにあらかじめ集められ保管されたものとみられること、ゴホウラ集積は貝輪の素材として居住空間に保管されたとみられるが、イモガイ集積は居住空間のほかに墓地にもみられること等が指摘された〔岸本・島1985〕。両氏の集成によって、その後の議論の基盤が整ったといえる。

1986年、山崎純男氏は岸本氏等の成果をもとに集積の形態を分類して、「ピット内に集めたもの、平地に雑然と積み上げたもの、円形に整然と積み上げたもの」の3種に分け、整然と積まれたものは「網籠などの容器に収納されていた可能性」があるとして、貝殻集積が貝交易のための計画的な行為の産物であることを指摘した。また「背面体層部を除去するゴホウラは、北部九州の腕輪素材を意識したもの」として、貝殻集積の貝殻と北部九州の貝輪を初めて具体的に関係づけた〔山崎1986〕。

1989年、島袋春美氏は、嘉門貝塚で新たに検出された貝殻集積をとりあげ、19遺跡の55貝殻集積を集成して分析した。氏はゴホウラを加工状況によって背面型と腹面型に分け、これに貝殻の死貝率を組み合わせることで貝殻使用の実態を把握し、これらを含む貝殻集積を時系列に並べて貝殻集積の変化を示した〔島袋1989〕。氏の論は産地からの視点の有効性を示すもので、その後の貝交易研究に大きな影響を与えた。2004年、氏はさらに32遺跡106基の貝殻集積を集成し、ゴホウラの死貝率の増加が「交易品の貝の調達に行き詰まっていた」こと、集積のまま残された貝殻は、腕輪には大きさが不足していたためであることを、事例の分析によって指摘した。氏の検討は貝殻提供地ならではの綿密な観察の賜物であり、一連の考察によって貝殻産地における貝交易の復元は飛躍的に進んだ。

2017年、筆者は貝殻集積とそこに含まれる貝輪粗加工品等を分析して貝殻産地からみた消費地との交易関係を論じた。島袋論を継承して貝輪粗加工品の分類から消費地との関係を再検討し、貝

殻集積を「居住地に付属し、貝殻を常時出し入れしながら粗加工品を製作しかつ保管する施設」であったとして、保管を専一とするそれまでの機能に、日常的な作業場としての機能を加えた〔木下2017：p.157〕。

ところで、ゴホウラはサンゴ礁の水路の低潮線直下から深さ40 mの岩礫底・砂礫底や、外海に面した礁斜面下部に普通に生息している〔久保・黒住1995：p.53, 黒住2011〕。先史人はこれを水中で捕獲することもあっただろうが、外海に面した岩場での採取では相応の危険が伴ったはずである。黒住耐二氏は、遺跡出土のゴホウラの多くが死貝であることに注目し、これらは海底で死んだゴホウラに大型のヤドカリがはいり、ヤドカリによって浅瀬に運ばれたものが捕獲されたものであることを指摘した〔黒住2011：pp.96～97〕。このような捕獲方法であれば、貝殻の採集は潜水よりよほど安全である。死貝の混在するゴホウラ貝殻では付着物の少ない良質のものもあれば、キクスズメガイやゴカイ・ヘビガイなどの付着痕跡の多い老貝もあり、さらに貝殻内部にカイメンによる小さな空洞が生じた粗質のものもある。沖縄の先史人によるゴホウラの入手行為は、潜水による直接捕獲以外に、サンゴ礁の表面でこうしたヤドカリを捕獲し、その貝殻の善し悪しを選別することでもあった。

大型イモガイのアンボンクロザメやクロフモドキは、サンゴ礁の浅海の波静かなアマモ場に生息する。生貝は低潮線から30 mの砂礫底に棲み、沖縄では普通にみられる貝で、先史時代にもよく食用に供された〔久保・黒住1995：p.122〕。貝殻集積のイモガイ類はすべて生きたまま搬入された生貝とみられる。イモガイ類は浅海での潜水によって捕獲されただろう。

Ⅲ 貝殻集積の年代測定結果

沖縄諸島で現在知られる貝殻集積は、37遺跡における151基、貝殻総数は1774である（表1）。これらは弥生時代併行期から古墳時代併行期の間、貝交易にかかわって沖縄諸島で準備され、交易後、あるいは交易されぬまま現地に残った貝殻である。その内訳はゴホウラ248個、アツソデガイ49個、イモガイ1477個である。このほかに包含層で検出された未成品や加工廃材も多い。これらはたまたま発掘調査されて見つかった数なので、実際に採取された貝殻数は膨大である。

表2は、今回年代測定を行った貝殻51個の一覧である。15遺跡を対象に、ゴホウラ13個（8遺跡）、アツソデガイ1個（1遺跡）、イモガイ類37個（アンボンクロザメ30個、クロフモドキ5個、イボカバイモ2個）を選んで測定した。図3は、測定結果の値（ 2σ ）を時期の古い順に並べたものである。較正年代値は確率で示されるので、確率分布曲線のピークがその所属年代を示す可能性が高いことになる。これら年代値の分布曲線のピークに注目して眺めると、以下のようないくつかのまとまりが見えてくる。すなわち、分布曲線のピークが501 cal BCより前にあるもの（A群）、同じくピークが500～201 cal BCにあるもの（B群）、山が200～1 cal BCにあるもの（C群）、山が cal AD1をまたぐもの（D群）、ピークが cal AD301～500にあるもの（E群）、ピークが cal AD501以降にあるもの（F群）である（図5）。北部九州等で弥生人の腕にはまったくみつかるゴホウラやイモガイ腕輪も、もとは沖縄で集積されたこうした貝殻の一つであった。その貝輪の炭素年代値がわかれば二つの現象を直接つなぐことができるが、貝輪の希少性等を鑑みると実現

表1 琉球列島で検出されたゴホウラ類・イモガイ類の貝殻集積一覧

no.	遺跡名	集積号数	ゴホウラ	アツソ デガイ	イモガ イ類	備考	文献等
1	うざはま 宇佐浜B貝塚 (国頭村)		1		43	イモガイを6～7段に重ね 最下段にゴホウラ1。P.54	岸本義彦ほか編1989『宇座浜遺跡発掘調査報告書』 沖縄県文化財調査報告書第93集
2	宇佐浜貝塚 (国頭村)		4			2015年確認	
3	うふどうぼる 大堂原貝塚 第Ⅲ層（名護市）	1	2		9		岸本利枝ほか2005『大堂原貝塚』名護市文化財調 査報告第17集
		2	6				
		3			5	サラサバテイ1混在	
		4		1	7		
		5			49	ヒレジャコ1混在	
		6			16	クロチョウガイ1, チトセ ボラ1混在	
		7			12	シャコガイ, シャコガキ1 混在	
		8			7		
		9			40		
		10			8	サラサバテイ1混在	
		11			8		
		12	1		5	そばでヒメジャコ9出土	
4	ぐしけん 具志堅貝塚 (本部町)	SH1	5		4		岸本義彦編1986『具志堅貝塚発掘調査報告』本部 町文化財調査報告書第3集
		SH2	3		21		
		SH3	1		5		
5	ナガラ原西貝塚 (伊江村)	なし			8	写真図版による	安里嗣淳編1979『ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報 告書』伊江村文化財調査報告書第8集
6	ぐしぼる 具志原貝塚 (伊江村)				47	V層	沖縄県立博物館資料による。 安里嗣淳ほか1985『伊江島具志原貝塚の概要』沖 縄県文化財調査報告書第61集
		1号			30		
		2号			11		
		3号			60		
		4号			60		
		5号			14	シャコガイ1混在	
		6号			4		
		7号			13		
7	阿良第二貝塚 (伊江村)	1号	2		20	「上向きに円形をなす」と あるが写真と異なる。P.58 写真の最小数	岸本義彦・島弘1985「沖縄における貝の集積遺構 —ゴホウラ・イモガイを中心に—」『紀要』第2号, 沖縄県教育委員会文化課, pp.68～83
		2号	8		2	「崩れており判然としな い。」 p.60写真の最小数	
8	阿良貝塚 (伊江村)		7			Ⅵ層。諸岡型貝輪粗加工品 6と穿孔のないもの1	安里嗣淳1983『伊江島阿良貝塚発掘調査報告』沖 縄県文化財調査報告書第48集
9	浜崎貝塚Ⅰ区 (伊江村)				8	写真ではクロフモドキカダ イミョウイモガイ	大城慧編1980『浜崎貝塚』伊江村文化財調査報告 書第9集
10	アンチの上貝塚 (本部町)	1号			6		盛本勲編2005『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査 報告書』本部町文化財調査報告書第8集
		2号			11		
		3号			76		
		4号			117		
		なし	6		3		
11	おせな 部瀬名貝塚 (名護市)	なし	2		4	J97. 内容不明。写真によ る数	岸本利枝ほか1996『部瀬名貝塚』ブセナリゾート 株式会社・名護市教育委員会
		なし			10	L98.「十数点」	
		なし	5		不明	L96.ゴホウラには小孔。 イモガイがゴホウラを取り 囲む。P.14. 5以上	

no.	遺跡名	集積号数	ゴホウラ	アツソ デガイ	イモガ イ類	備考	文献等
12	熱田第2貝塚 (恩納村)		3			背面貝輪粗加工品	金武正紀ほか1979『恩納村熱田第2貝塚発掘調査報告書』日本電信電話公社沖縄電信電話管理局・沖縄県教育委員会
13	はまやばる 浜屋原貝塚A地点 (読谷村)		4			H4ピットⅢ層	島福善弘ほか1977『島嶼の考古』創刊号, 沖縄国際大学考古学研究会
14	おおくぼる 大久保原貝塚 (読谷村)	第1号			9	読谷村教育委員会による資料提供	仲宗根求2012「読谷村における先史時代の墓と墓制－木綿原発見後の三つの事例」『沖縄考古学会2012年度研究発表資料 先史時代の墓と墓制』, pp.33～40
		第2号	4				
		第3号		1	2		
		第4号			3		
		第5号			3		
		第6号			4		
		第7号	3			諸岡型貝輪粗加工品3	
		第8号			3		
		第9号			7		
		第10号			4	イモガイ粗加工品1(タテ型厚手)	
15	なかがわばる 中川原貝塚 (読谷村)	第1号			5	読谷村教育委員会による資料提供	仲宗根求1992「沖縄県中頭郡読谷村字渡慶次中川原貝塚」『日本考古学年報43(1990年度版)』日本考古学協会, pp.630～632
		第2号			4		
		第3号			6		
		なし	7		3		
16	かたえばる 片江原遺跡 (読谷村)	第1号			8	読谷村教育委員会による資料提供	仲宗根求1993「企画展 砂丘は語る一字座・渡慶次・儀間・高志保の海岸遺跡一」『資料館だとり』No.27, 読谷村歴史民俗資料館
		第2号			3		
		第4号			3		
		第5号			3		
		第6号			3		
		第9号			7		
		第10号	4		2		
		第11号			6		
		第12号	5				
		第13号	3				
17	もめんばる 木綿原遺跡 (読谷村)				7	個数は岸本ほか1985のTable1による	当間嗣一ほか1978『沖縄県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書』読谷村文化財調査報告書第5集
18	いれいばる 伊礼原D遺跡 (北谷町)	Vb層			35	アンボンクロザメ15, クロフモドキ20	大当原式土器供伴。貝殻は小ぶり。P.39。山城安生・島袋春美編2013『伊礼原D遺跡』北谷町文化財調査報告書第35集
19	伊礼原遺跡 (北谷町)	SS01	6		13	「浜屋原式が主体をなす地域」p.31	島袋春美2014『伊礼原遺跡・伊礼原A遺跡』北谷町文化財調査報告書第36集, 北谷町教育委員会
		SS02			55	浜屋原式カメ, イノシシ距骨伴出。P.33	
		SS03			5	浜屋原式カメ伴出。P.33	
20	くわいばる 小堀原遺跡 (北谷町)	VI層	6				山城安生・島袋春美編2012『小堀原遺跡』北谷町文化財調査報告書第34集, pp.30～31
21	うじどまりかねくぼる 宇地泊兼久原第一遺跡 (宜野湾市)				9	9+。写真による	宜野湾市教育委員会2002『宇地泊兼久原第一・第二・第三遺跡発掘調査記録』宜野湾市文化財保護資料集第53集
			5			5+。写真による	
			不明	不明		VI層ホ14。沖縄国際大学	
			不明	不明	不明	VI層ハ18	
			6	11		上2例について図版で推定される数	中村愿編1989「宜野湾市宇地泊兼久原遺跡発掘調査報告」『沖国大考古』第10号, 沖縄国際大学文学部考古学研究室

no.	遺跡名	集積号数	ゴホウラ	アツソ デガイ	イモガ イ類	備考	文献等
22	あらぐすくしちやばる 新城下原第二遺跡 (宜野湾市)	1			34		片桐千亜紀編2006『新城下原第二遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター報告書第35集
		2			20		
23	あざまばる 安座間原第1遺跡 (宜野湾市)		5+ <i>a</i>		5		呉屋義勝編1989「真志喜安座間原第一遺跡・第二遺跡」『土に埋もれた宜野湾』, 宜野湾市教育委員会。宜野湾市教育委員会1993『イガルー島 宜野湾展 沖縄人のルーツを探る!』宜野湾市文化財保護資料No.38, p.29写真48
24	安座間原第2遺跡 (宜野湾市)				9	堅穴遺構内の集石土坑脇。P.76	呉屋義勝編1989「真志喜安座間原第一遺跡・第二遺跡」『土に埋もれた宜野湾』, 宜野湾市教育委員会
					9	18号堅穴遺構北側	
					14	第2号埋葬墓の土壇隅	
25	かじょう 嘉門貝塚B (浦添市)	1	6			IV層貝溜	松川章編1993『嘉門貝塚B』浦添市文化財調査報告書第21集
		2			13		
		3			11		
		4				ヒメジャコ7混在	
		5	3				
		6		2			
		7	6				
		8	29	5	8		
		9	6	1			
		10	5				
		11		4			
		12	2				
		13	4		32		
		14			4		
		15			5		
		16	3				
		17	2				
		18	2				
		19			8		
		20			4		
		21		1	34		
		22	3				
		23		5			
		24	6				
		25	2				
		26			2		
		27	1	8			
		28			4		
		29			4		
		30			3		
		31				ヒメジャコ18混在	
		32	3				
		33			2		
		34		3			
		35			14	ヒメジャコ3混在	
		36			3		
		37	4				
		38			7		
26	嘉門貝塚A (浦添市)	第1号			14	上下2段に積まれる。殻高9.0～10.4cm, 平均9.4cm	松川章編1991『嘉門貝塚A』浦添市文化財調査報告書第18集
		第2号			32	殻高9.3～12.9cm, 平均10.5cm	
		第3号	3			背面有孔1	

no.	遺跡名	集積号数	ゴホウラ	アツソ デガイ	イモガ イ類	備考	文献等
27	うけん 宇堅貝塚A地点 (うるま市)		5	2		G7の2層。全て外唇部穿孔	大城剛1992「具志川市宇堅貝塚出土の土器」『沖縄考古学会・鹿児島県考古学会 第3回合同研究会 弥生土器 資料集』pp.7～22
		第1集積			41		
		第2集積			19		
					不明	イモガイの集積は合計3基とされる	
28	宇堅貝塚A地区 (うるま市)		1		12	ヒメジャコ1混在	金武正紀編1980『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚発掘調査報告書』具志川市教育委員会
						個数は岸本ほか1985p.59写真による	
29	へしきや 平敷屋トウバル 遺跡 (うるま市)	1号			7		島袋洋ほか1996『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県文化財調査報告書第125集
		2号			10		
		3号			3		
		4号			3		
		5号			6		
		6号			2		
		7号			8		
		8号			10	不明	
			5			2014年報告書。背面穿孔。I 9区VI層	横尾昌樹ほか2014『平敷屋トウバル遺跡』うるま市文化財調査報告書第22集
30	つけん 津堅貝塚 (うるま市)	1号			6	Ⅶ層	宮城伸一ほか2005『津堅貝塚』勝連町の文化財第23集
		2号			7	Ⅶ層	
		3号			8	Ⅵ層	
		4号			7	Ⅶ層	
		5号			6	Ⅵ層	
		6号			13	Ⅶ層	
		7号			9	Ⅶ層	
31	にしそこばる 西底原貝塚B地点 (渡名喜村)				12	p.58写真による	岸本義彦・島弘1985「沖縄における貝の集積遺構ーゴホウラ・イモガイを中心にー」『紀要』第2号, 沖縄県教育委員会文化課, pp.68～83
32	渡名喜島大道原 (渡名喜村)				4	p.108	島袋洋ほか1990『渡名喜島の遺跡Ⅱ』渡名喜村教育委員会
33	おおはら 大原貝塚A地点 (久米島町)		7			熱田第二貝塚と同じ加工品	当間嗣一ほか1980『久米島大原貝塚発掘調査報告』沖縄県文化財報告書第32集
34	大原第2貝塚 (久米島町)	イモガイ集積			6	Ⅲ層。個数については未報告	盛本勲1994「久米島・大原第2貝塚B地点の発掘調査」『考古学ジャーナル』N0.373, pp.30～33
		ゴホウラ・イモガイ集積	1		3		
35	清水貝塚 (久米島町)				19	Ⅱ層下部	盛本勲編1989『沖縄県・久米島具志川村清水貝塚発掘調査報告書』具志川村文化財調査報告書第1集
36	ふるぎまみ 古座間味貝塚Ⅲ区 (座間味村)		22			第1号住居址内。内12個に穿孔	岸本義彦1982『古座間味貝塚範囲確認調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第43集
37	あはれんうら 阿波連浦貝塚 (渡嘉敷村)		8	5		ホ14グリッドⅥ層(アツソデガイの数値を図版との照合で4から5に修正)	高宮廣衛・中村恵ほか1999「渡嘉敷島阿波連浦貝塚発掘調査報告」『沖国大考古』第12号, 沖縄国際大学文学部考古学研究室
合計	37 遺跡	151	253	49	1477	1779	貝殻総数

表2 貝殻集積の貝殻 年代測定資料一覧(2018年度)

遺跡 (北から南へ配列)	遺構・出土層	図3対応番号	ゴホウラ類		イモガイ類			貝殻集積 構成個数
			ゴホウラ	アツソデ ガイ	アンボン クロザメ	クロフモ ドキ	イボカバ イモ	
具志原貝塚	西区V層	43, 44, 45				3		47
大久保原遺跡	貝殻集積2号	17	1					4
	貝殻集積10号	29			1			5
中川原遺跡	1号集積	16	1					10
	3号集積	51			1			6
片江原遺跡	貝殻集積2号	18			1			3
	貝殻集積4号	28			1			3
	貝殻集積12号	42	1					5
木綿原遺跡	I地区Ⅲ層	9, 27			2			7
伊礼原遺跡	V層・SS01	32, 33, 34	1				2	20
	V層・SS02	10			1			55
	V層・SS03	11			1			5
伊礼原D遺跡	Vb層・4317SS	46, 47			1	1		35
小堀原遺跡	Ⅵ層・87KSS	6, 7	2					6
新城下原第二遺跡	V層・貝殻集積1	35, 36, 37			3			34
	V層・貝殻集積2	38, 39			1	1		20
嘉門貝塚B	Ⅳ層・8号集積	23, 24, 25, 26	3	1				42
	Ⅳ層・13号集積	1, 2, 3			3			35
嘉門貝塚A	Ⅳ層・第1号貝殻集積	4, 5			2			14
	Ⅳ層・第2号貝殻集積	19, 20			2			32
宇堅貝塚	第Ⅱ層	14, 15	2					6
	第Ⅰ層・第1集積	21, 22			2			41
平敷屋トウバル(県)	V層・集積1	8			1			7
	V層・集積2	30, 31			2			10
	V層・集積7	40, 41			2			8
平敷屋トウバル(市)	Ⅵ層	12, 13	2					5
津堅貝塚	Ⅶ層・6号集積	48, 49, 50			3			13
計			13	1	30	5	2	478

は難しい。これを着けている弥生人の炭素14年代はどうだろう。弥生人骨で炭素14年代が測定されている例は限られているが、田中良之氏等の九州大学チームによって測定された事例があるので、これを参考にしよう[田中2011]。

図4はこれまでに知られる甕棺人骨の較正年代を古い順にならべたものである。人骨の年代分布についても、数値分布の山の位置からいくつかのグループ分けが可能である。すなわち①～④、⑤～⑩、⑪～⑭、⑮～⑯の4グループに分け、それぞれa群からd群としよう(図5)。

以下このグループ分けに従い、貝殻提供地の動向を中心に消費地との対応をみてゆこう(図5)。

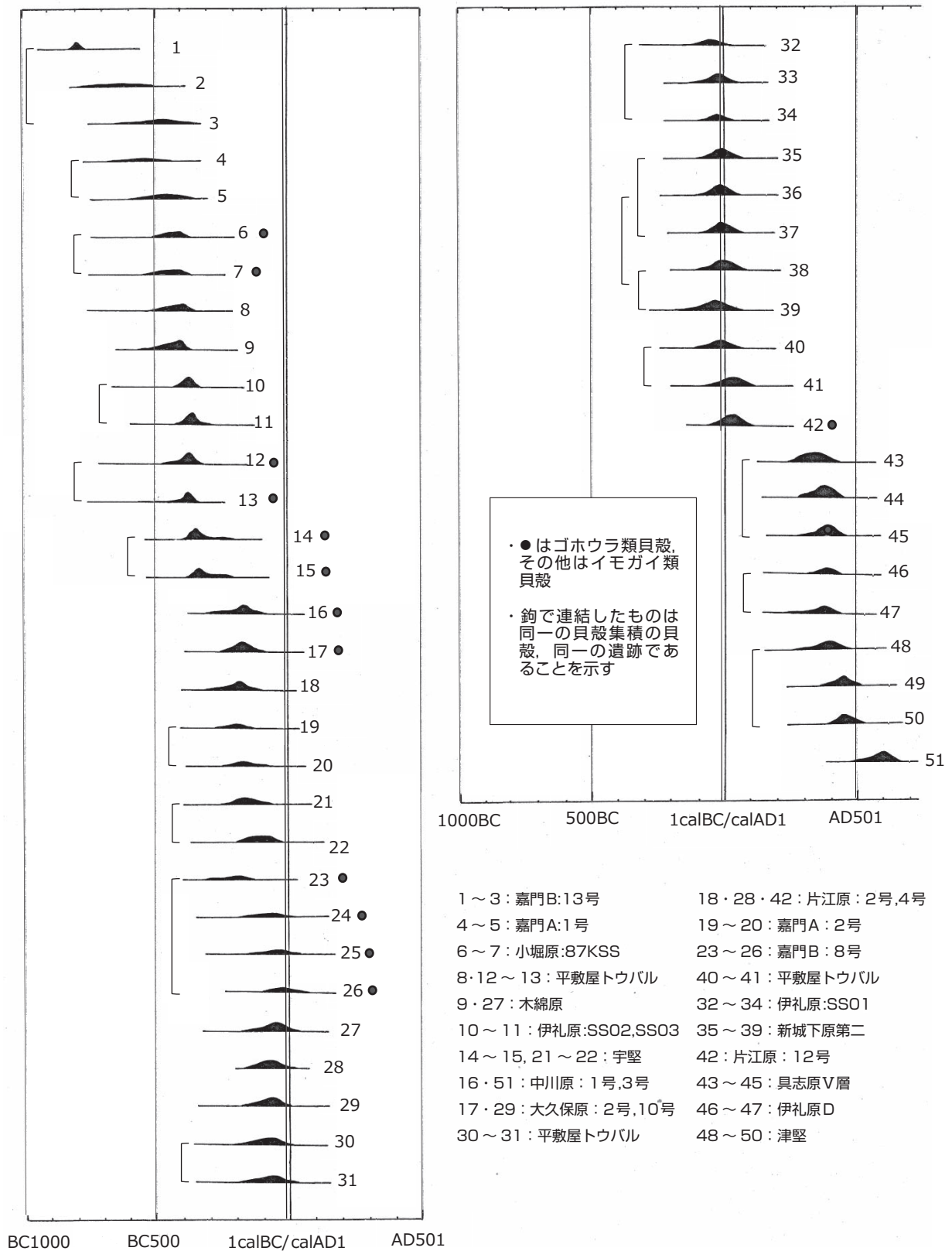


図3 貝殻集積の較正年代

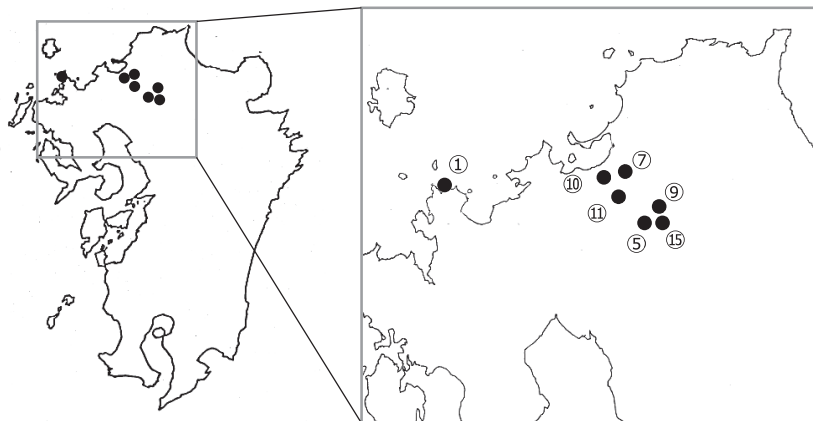
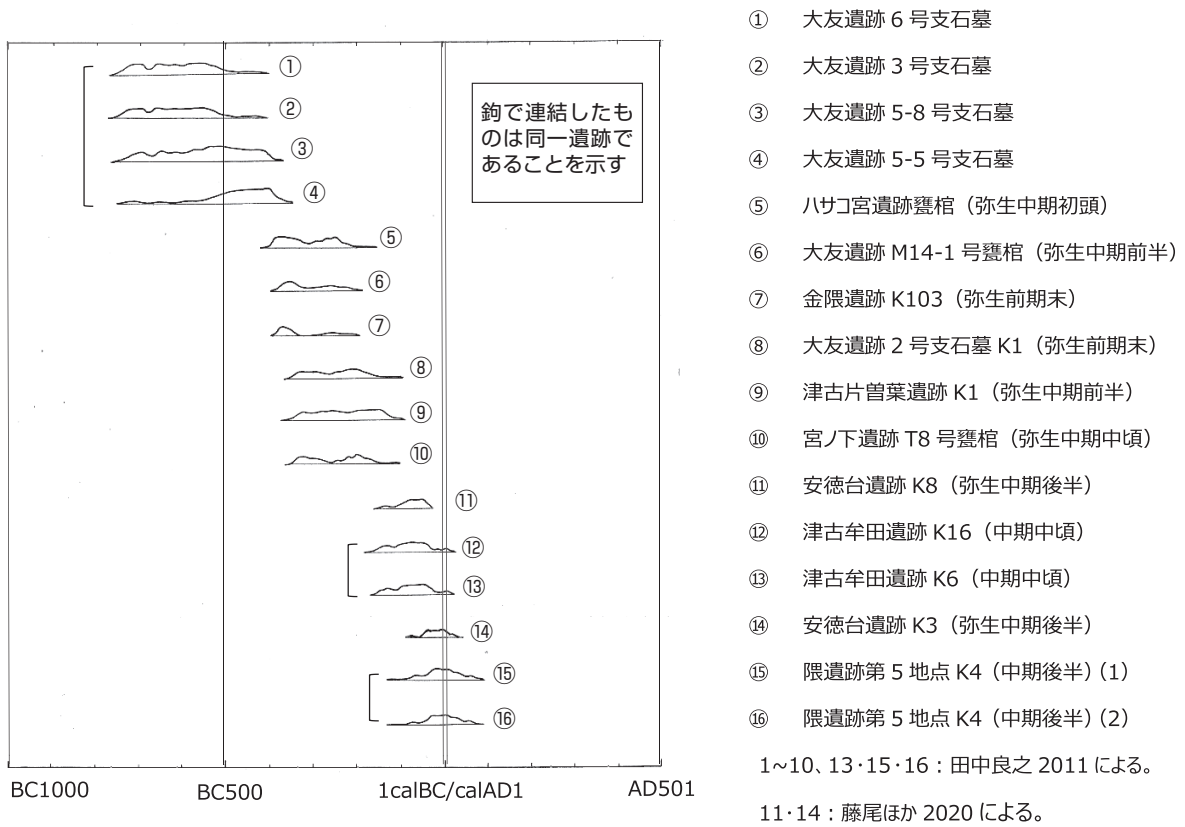


図4 北部九州の支石墓・甕棺人骨の較正年代と遺跡の位置

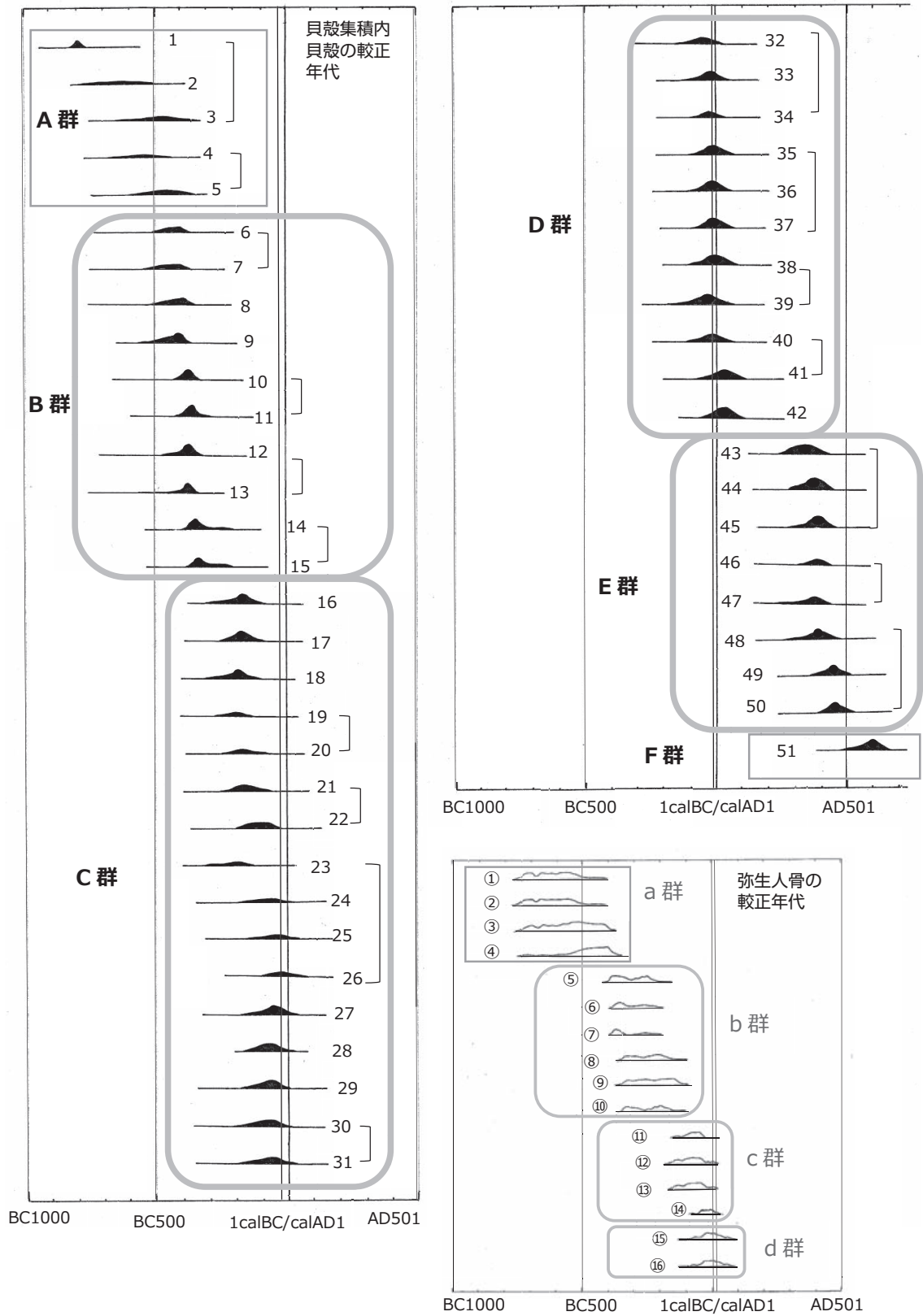


図5 貝殻集積と弥生人骨の較正年代

IV 貝殻提供地からみた貝交易の動向

1. A 群の時期

① 貝殻産地

A 群(確率分布曲線のピークが 501 cal BC より前にあるもの)としたのは図 3 の No.1 ～ 5 である。No.3 と No.5 は 500 cal BC よりやや新しいところに確率のピークをもつが、それぞれ同一の貝殻集積に A 群に対応する値の貝殻があるので、ここに含めている。No.1 ～ 3 は今回年代測定した中でもっとも古い値を示した例(嘉門貝塚 B の 13 号集積)である。貝殻が集積する遺構の状況をみると、表面の部分とその下を埋める貝殻で構成されているようなので(図 1-1)、年代値にみえる数値のばらつきはこの形成過程に関わるのかもしれない。なお本集積はゴホウラ 4 個、イモガイ 32 個からなり、ゴホウラはすべて背面中央に小孔が穿たれている。No.4 ～ 5 は No.1 ～ 3 に隣接する遺跡の集積(嘉門貝塚 A、1 号集積)で、貝殻は全てイモガイである。

今のところ年代測定をした中では本 A 群が貝交易を示すもっとも古い貝殻集積であり、この段階ですでにゴホウラとイモガイが集められていることがわかる。なお嘉門貝塚 B では阿波連浦下層式⁽⁸⁾の古相を示す土器の出土が報告されており、貝殻集積の時期に対応するとみられる。

② 貝輪消費地

A 群の貝殻集積に対応するのは弥生人骨の a 群である。a 群の大友遺跡は貝交易の初期から琉球列島産の貝殻の運搬に大きな役割を果たした人々の墓地である[木下 1989]。その最初の人々は支石墓に葬られていた。宮本一夫氏は近年の発掘調査の成果をふまえて、支石墓をその下部構造によってⅠ式からⅣ式に以下のように分類した[宮本 2001](括弧内は筆者による)。

Ⅰ式 : 夜臼式新段階(弥生早期)

Ⅱ式・Ⅲ式: 板付Ⅰ式期(弥生前期中葉)

Ⅳ式 : 伯玄式期(弥生前期中葉)以降

遺跡ではⅡ式の 8 号支石墓(No. ②)にオオツタノハ腕輪、Ⅲ式の 57 号支石墓(図 6-4 にゴホウラ腕輪が伴っている[東中川編 1981, 宮本編 2001]。後者は時期のわかるゴホウラ腕輪の最古例で、ゴホウラの背面を円形に使った組合腕輪であった。このゴホウラ腕輪 2 個が二枚貝腕輪 1 個とともに成人男性の右腕にはめられていた(図 6-1 ～ 3)。

大友遺跡と並ぶ遺跡では、山口県中ノ浜遺跡の ST905 墓でイモガイ腕輪の使用例が知られる。腕輪は板付Ⅱ a 式(弥生前期中葉)の小壺を伴う覆石墓の女性人骨とともに出土した(図 6-5 ～ 8)。

以上から、弥生前期中葉から中葉には北部九州から響灘に至る沿岸地域において琉球列島産巻貝の消費が始まっていることがわかる。ただ、ここで最初に登場するのがオオツタノハであることに注意しよう。オオツタノハの産地はトカラ列島から種子島であることから[黒住 1994]、九州弥生人は琉球列島への南下の最初にオオツタノハを入手して腕輪とし、その後さらに南の沖縄諸島に至ってゴホウラとイモガイを獲得したといえる。沿岸地域の支石墓人による琉球列島産大型巻貝の

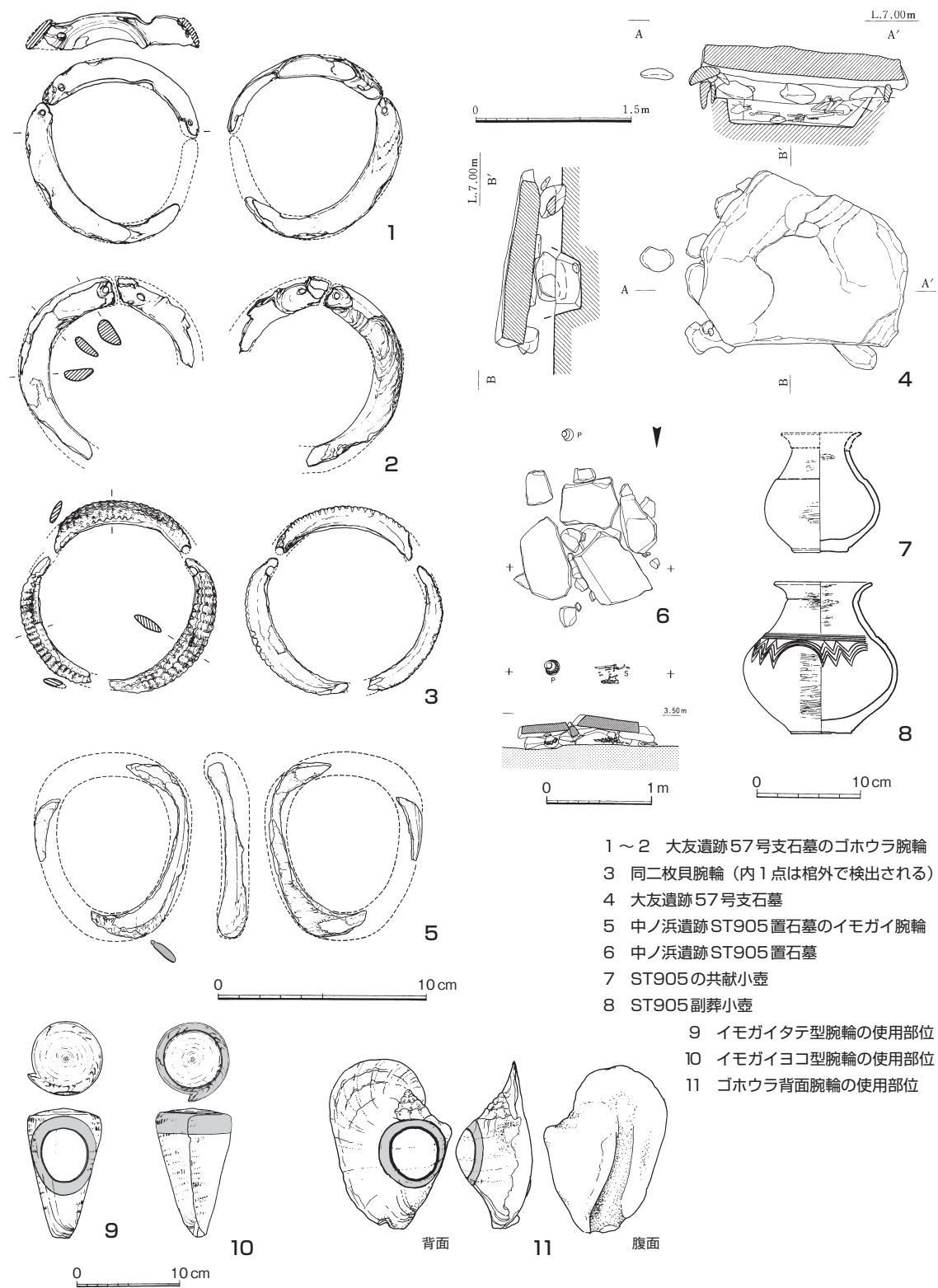


図6 最古のゴホウラ腕輪・イモガイ腕輪



写真2 嘉門貝塚B地点13号集積のゴホウラ

消費は明らかに貝殻入手の開拓を含んでおり、彼等の動きが、次に始まる平野部農耕民による本格的消費を導くことになる。

③ 貝輪粗加工品

今回の測定で最古の年代値をだした嘉門貝塚Bの13号集積には、背面中央に内径1.5 cmほどの孔を穿つゴホウラが4個出土している（写真2）。孔は外側からの敲打によって注意深くあけられており、4点ともに揃った形状をなす。この孔は、運搬のための紐通し孔とも考えられるが、この位置では腹面があって紐を通しにくいので、運搬用の穿孔ではないようだ。背面中央を選んであけたのは、貝殻の厚さを示し、後続作業の穿孔をしやすくするための配慮であろう。この行為は貝輪作成のための準備の加工、すなわち貝輪素材製作のための作業とみてよい。

このタイプの貝輪素材はあらゆる形状のゴホウラ腕輪に向いているが、この時期のゴホウラ腕輪として対応するのは、大友遺跡57号支石墓の背面貝輪である。大友遺跡では続く時期にゴホウラ背面貝輪が6点知られるので、大友人はこのタイプの貝輪素材を輸入していた可能性がある。

2. B群の時期

① 貝殻産地

図3のNo.6～15の10例がB群（確率分布曲線のピークが501 cal BCより後で200 cal BCより前にあるもの）に対応する。この時期にはゴホウラだけの貝殻集積が登場する。紀元前400年頃のNo.6～7（小堀原遺跡87KSS）では厚手で良質なゴホウラ貝殻が集まり（図1-4）、同じくNo.12～13（平敷屋トウバル）ではゴホウラ背面の外唇側に小孔を穿つ貝殻が5個揃ってみられた。ただこの位置に小孔があると背面貝輪は作れない。したがってこれは大友人用の貝輪ではなく、腹面貝輪用の素材、すなわち腹面貝輪を専らにする福岡平野の弥生人用の輸出品であることがわかる。

No.14～15（宇堅貝塚）ではゴホウラとともにアツソデガイが残されている。

アツソデガイはゴホウラに似た巻貝で、ゴホウラより小さく同様に分厚いことが特徴である。⁽¹²⁾ 弥生時代前期末以降、北部九州を中心に男児専用の腕輪素材として使われた〔木下2010〕。この貝殻は西北九州沿岸部では使われていない腕輪素材なので、アツソデガイの登場は、北部九州平野部の弥生人が貝交易の消費者になったこと告げるメルクマールでもある。腹面貝輪用の貝輪素材の登場とともに、この時期に農耕社会の弥生人と貝塚人との貝交易が始まったことがわかる。

図3 No.10～11（伊礼原遺跡 SS02）のイモガイ集積では55個の貝殻が残され、交易量の増加が窺われる。貝殻集積は建物跡のある生活域で検出されることが一般的だが、この時期には弥生系土器⁽¹³⁾を伴う墓地の広場に作られた象徴的な事例が登場する（No.9 木綿原遺跡）。貝交易が沖縄の先史人の精神面に何らかの意味を持ち始めたことを示唆する事例である。

これらの貝殻集積がみつかる層では、弥生時代前期に併行するとされる仲原式（新段階）、阿波連浦下層式、浜屋原式が伴い、さらに北部九州の弥生前期型式の土器、同中期の土器やその模倣土器が出土し、弥生文化の文物の搬入状況を伝えている。

② 貝輪消費地

B群の貝殻集積に対応する人骨の年代はb群の6例（図5⑤～⑩）で、すべて北部九州平野部の弥生人である。6人が納められた甕棺の型式は、弥生前期末から中期中葉を示す。⑦の金隈型遺跡103号甕棺に注目しよう。この甕棺の被葬者は右腕にゴホウラ輪を2個はめており、これがいわゆる北部九州平野部の弥生社会におけるゴホウラ腕輪の始まりとされる。貝輪はゴホウラ腹面を用い上唇を残した特徴的な形で、金隈型と呼ばれる。金隈103号人の較正年代は紀元前400年から350年の間にあるので、沖縄では平敷屋トウバル、宇堅貝塚のゴホウラ集積に対応するであろう。

福岡平野を中心とした弥生社会は、金隈例以降ゴホウラ腕輪の使用を本格化させる。ゴホウラ腕輪は、金隈型から間もなくゴホウラ上唇を除去した厚手型となり、中期前半には安定した型の諸岡型になる（図8-2）。これらはすべてゴホウラの腹面を使うもので、この点で西北九州沿岸部人の背面貝輪とは明確に異なっていた。諸岡型の登場によって1人の弥生人がはめる貝輪数は4個～8個になり、その分布も北部九州を超えて肥後、肥前、薩摩、伊予に及んだ。この時期、ゴホウラの消費量は激増する。

平野部におけるイモガイ消費はゴホウラに遅れ、中期前半に佐賀平野でヨコ型⁽¹⁴⁾（図6-10）の腕輪の使用が始まる。一方沿岸部では、大友遺跡などの西北九州の人々によってより早くから消費されていた。大友遺跡の弥生前期中葉の伯玄式甕棺K1（1次調査1号甕棺）では、女性が合計10個のイモガイ腕輪（タテ型）を着装していた（図7）。大友遺跡ではこのほかにも同様の腕輪の使用が中期後半まで継続する。イモガイは、沿岸部の人々がとくに好み、平野部の農耕民に先駆けて消費された貝殻であった。

③ 貝輪粗加工品

この時期、沖縄で生産されるゴホウラの輸出用加工品に、北部九州の腹面貝輪に合わせた工夫がみられるようになる。一つ前のA群の時期、沖縄の輸出貝殻は、支石墓人や西北九州沿岸部人の

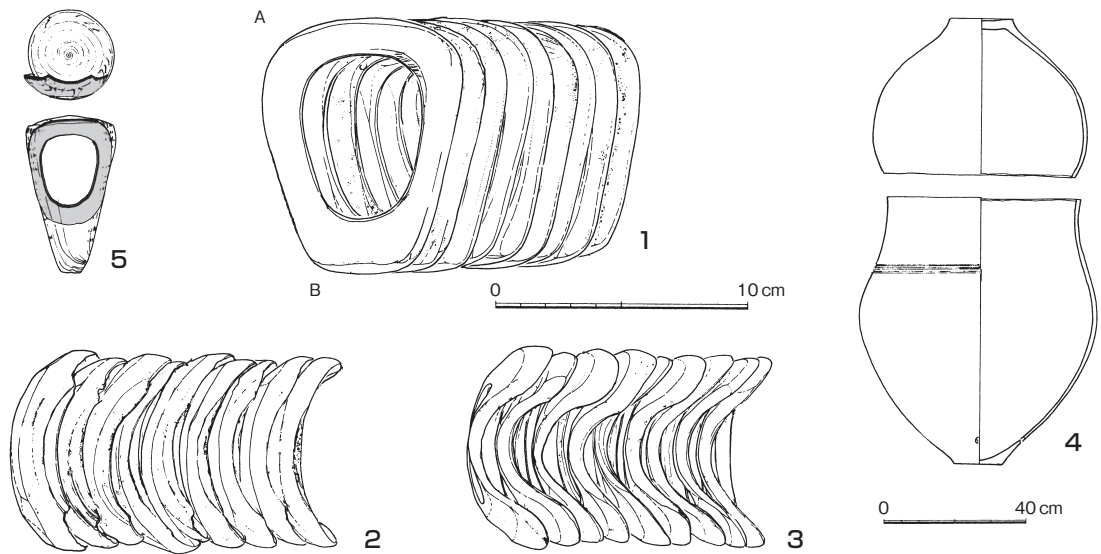


図7 大友遺跡K1（1次調査）とイモガイ腕輪

1 K1内で女性が右腕に装着していたイモガイ腕輪8点、2 1をA側から見た図
3 1をB側からみた図 4 K1、5 イモガイ腕輪使用部位

ためにゴホウラ背面を残した背面貝輪用の貝輪素材であった。B群の時期になると、これとは別に、北部九州弥生人のために腹面を残して背面を除去する腹面貝輪用の粗加工品が新たに登場する（図8-1）。北部九州で諸岡型貝輪が登場すると、沖縄でも同じ型式の貝輪が作られているのは驚きである（図8-3）。沖縄の諸岡型貝輪は北部九州のものより緩やかな曲線や左右対称を好む点で、癖の強い弥生人の貝輪とは異なっているが、貝輪そのものの仕上がりは弥生社会のものと変わらない。貝輪に関する消費地の情報が沖縄に逐一もたらされており、両者間の関係は極めて密接だったことが窺える。

イモガイの粗加工品はどうであろうか。嘉門貝塚Bや平安山原B遺跡、大原貝塚A地点では、螺塔部のみの低い円筒形の粗加工品（破片）や螺塔を擦り切って本体から切り離した後の廃材が複数個出土している（図9）〔松川編1993、島袋編2015、當眞ほか1980〕。安座間原第一遺跡では、ゴホウラ、イモガイ類とともに「割截されたアンボンクロザメの螺塔部のみが坑内に収納」されていたという〔呉屋ほか1989：p.72〕。この「割截された螺塔部」がまさにイモガイ腕輪の粗加工品である。イモガイ粗加工品はゴホウラ粗加工品に比べると容易に製作でき、貝殻の質も平均的によい。このため交易上の不良品も少なく効率的に搬出され、貝殻集積内に残されなかったとみられる。遺跡でイモガイ粗加工品があまりみつからないのは、こうした事情によるのだろう。

ゴホウラ・イモガイともに貝輪粗加工品には貝輪にあわせた多くの種類があったと推測される。注意したいのは、粗加工品の形状に係わらず、これらにしばしば不規則な研磨が認められることである（図8-1のA）。研磨は部分的であるが、同程度の加工状況の貝輪に施されている。研磨面の存在は、粗加工品が計画的に中断された段階の「製品」であり、かつ自家用の腕輪のための未成品ではないことを示唆する。粗加工品は貝交易における「商品」とみてよいだろう。

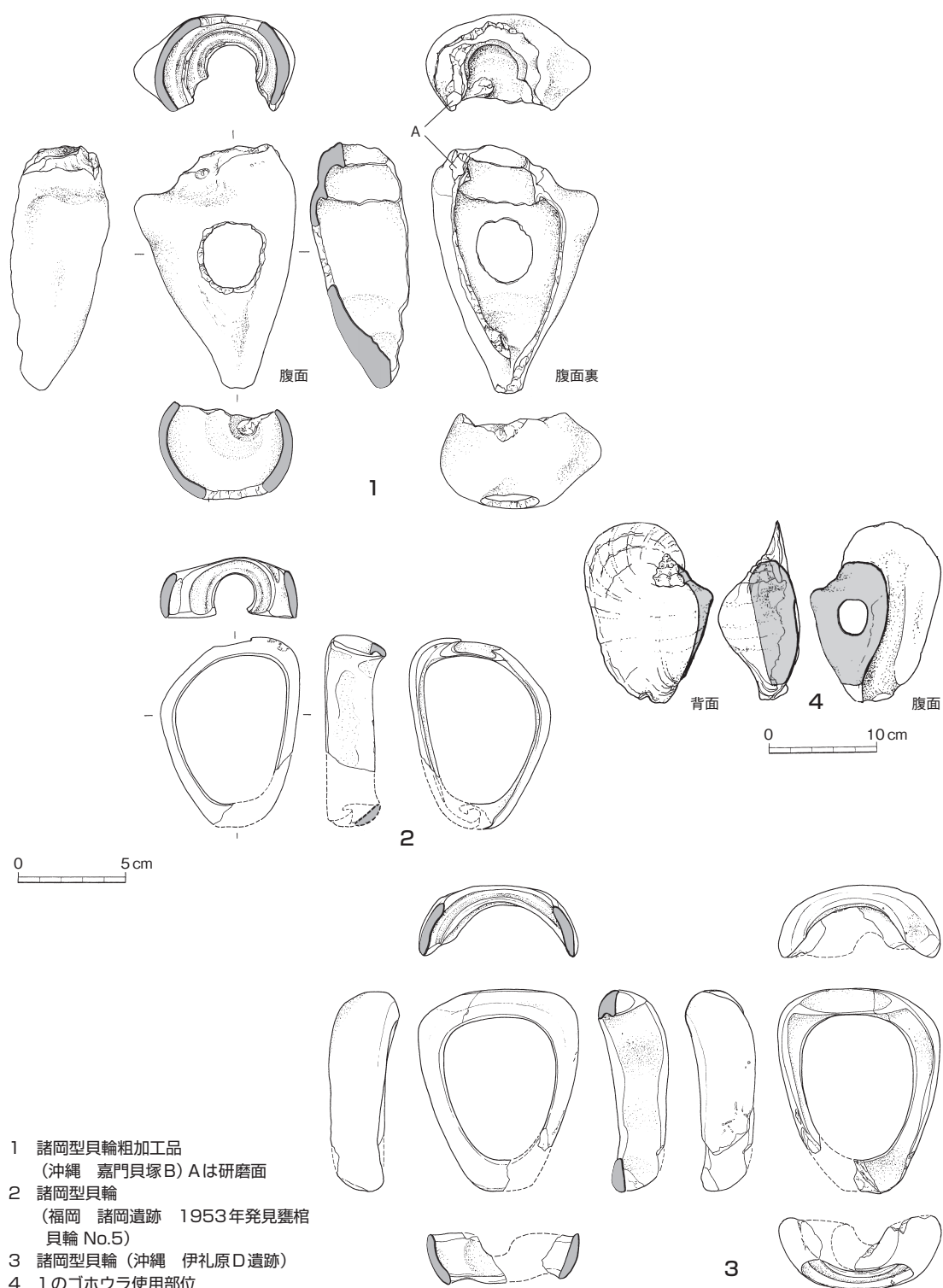


図8 ゴホウラ諸岡型貝輪とその粗加工品

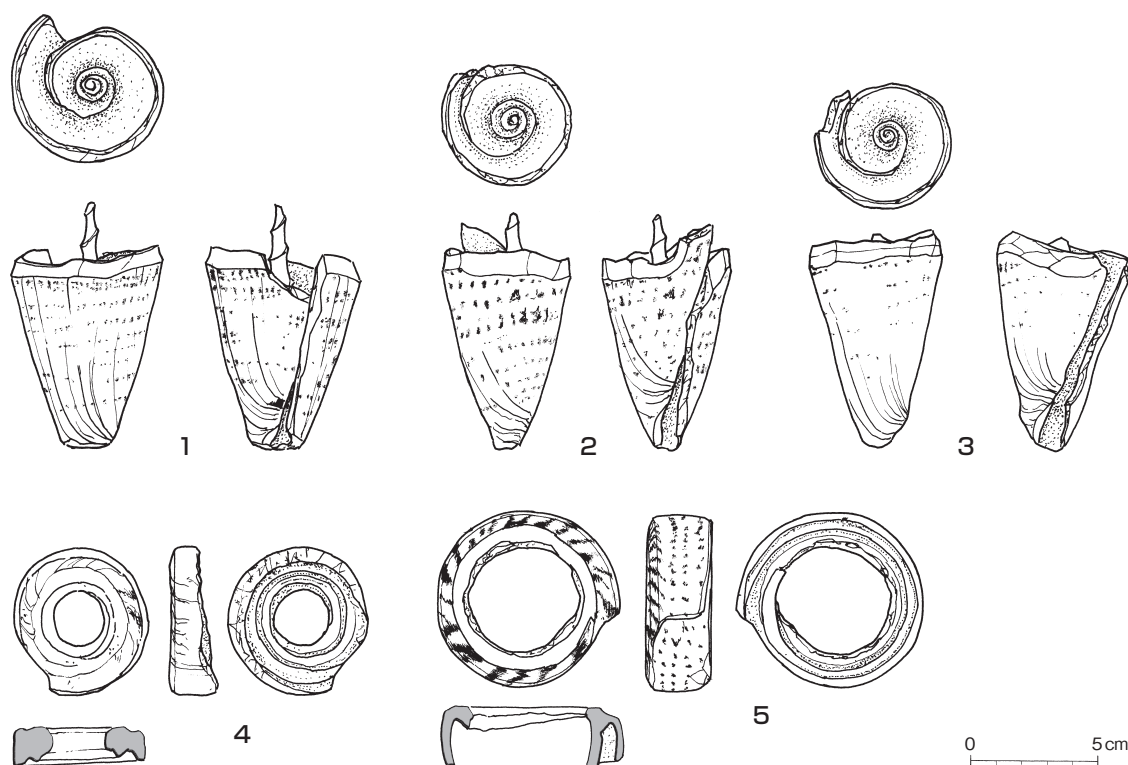


図9 イモガイ貝輪廃材と粗加工品（嘉門貝塚B）
貝輪廃材（1～3），貝輪粗加工品（4～5）

3. C 群の時期

① 貝殻産地

図3 No.16～31の16例がC群（確率分布曲線のピークが200～1 cal BCにあるもの）に対応する。木綿原遺跡では墓地の中央にあるイモガイ集積も存続しており、B群の状況が継続していることがわかる。No.23～26（嘉門貝塚A：8号集積）は同じ集積に含まれるゴホウラ・アツソデガイ集積の測定値である。No.23でアツソデガイのみ古い測定値が出ているのは、この集積が古くから継続して使用されていることを示すのかもしれない。

嘉門貝塚Aに集積された貝殻には老成した貝殻やカイメンによる空洞化の進んだ貝殻が目立ち、質の悪い貝殻まで集められていたようである。集積内にこうした粗質の貝殻がみられるのは、比較的良質の貝殻が集められていたB群の時期と大きく違う点である。No.16（中川原遺跡）はゴホウラ7個の集積であるが、すべて貝殻の薄い若い貝殻で、腕輪の製作には耐えないものである。後述のように、この時期に北部九州での貝殻消費量は最大になる。良質素材とはいえない薄いゴホウラや粗質の貝殻まで集められた状況は、島袋春美氏が早く指摘したように、増大する需要に応えるための対策であろうか。

なお、No.29（大久保原）の集積には浜屋原式土器が伴っており、型式との関係を示して貴重である。

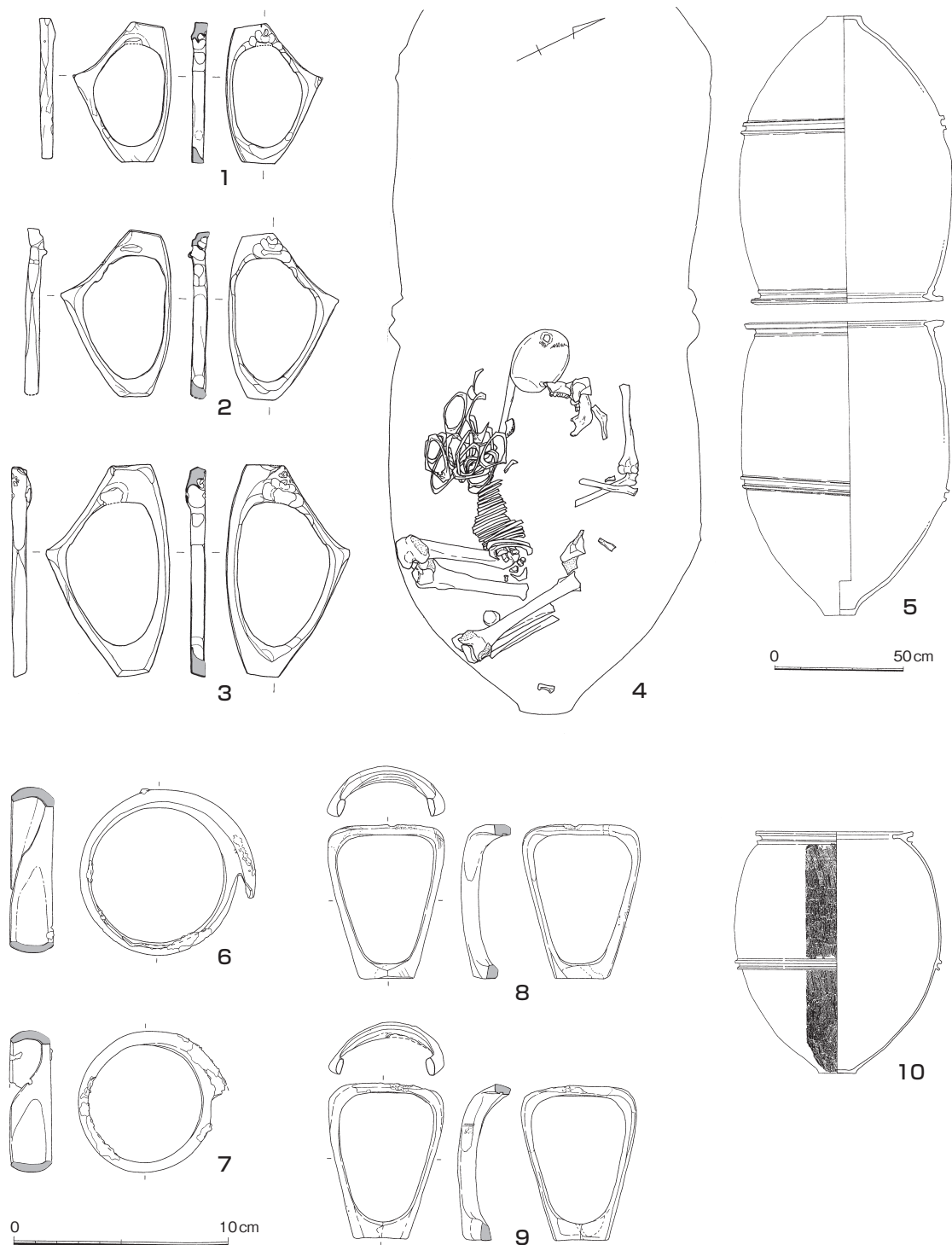


図10 安徳台遺跡K2・吉野ヶ里遺跡（丘陵地区Ⅸ区）SJ2775の貝輪

1～3 安徳台遺跡K2出土ゴホウラ立岩型貝輪（右肩上の貝輪18点のうち）、4 貝輪着装人骨出土図、
5 K2（合口甕棺）、6～7 吉野ヶ里遺跡（丘陵地区Ⅸ区）SJ2775のイモガイヨコ型貝輪（左腕着装11
点のうち）、8～9 同上イモガイタテ型貝輪（右腕着装25点のうち）、10 SJ2775（石蓋単棺）

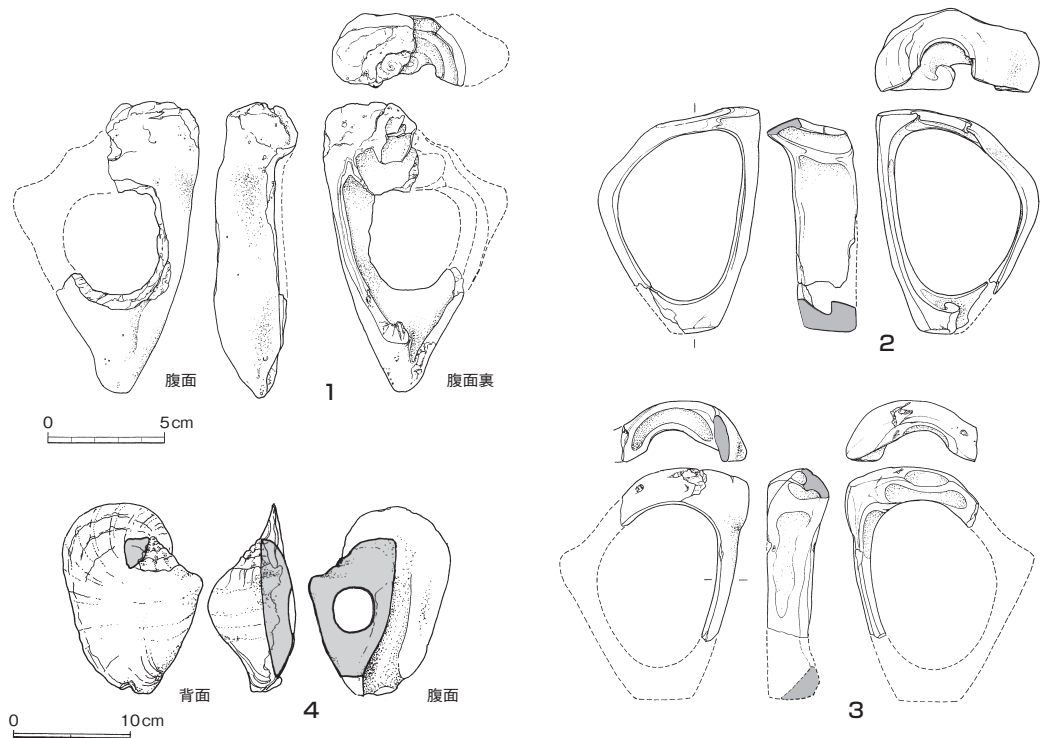


図 11 ゴホウラ立岩型貝輪とその粗加工品

- 1 ゴホウラ立岩型貝輪粗加工品（沖縄 平敷屋トウバル遺跡6地区Ⅳ層下部）
- 2 ゴホウラ立岩型貝輪（佐賀 吉野ヶ里遺跡丘陵地区Ⅲ区）SJ0384
- 3 ゴホウラ立岩型貝輪（沖縄 宇堅貝塚）
- 4 1のゴホウラ使用部位

② 貝輪消費地

C 群の貝殻集積に対応する人骨の年代はc 群の6 例（図5 ⑪～⑭）である。これらは甕棺編年で、弥生中期中葉から後葉に比定されている。この中の⑪は福岡県安德台遺跡の8 号甕棺である。この甕棺は、ゴホウラ腕輪をはめた人骨をいれた2 号甕棺を切って埋設されている。8 号甕棺、2 号甕棺ともに立岩式甕棺（弥生中期後葉）なので、同一型式の時間内に埋葬されたものとみてよいだろう。2 号甕棺人は成人男性で、右腕にゴホウラ腕輪を25 個以上はめ、さらに右肩に18 個を副葬していた〔茂編 2006〕（図10-4・5）。一人が43 個の貝輪をもつ事例はこれまでに知られる最多数例である。貝輪は立岩型とよばれる形で、ゴホウラ腕輪の変化の最終段階に相当する（図10-1～3）。この時期、立岩型貝輪にはゴホウラ貝殻上の虫食い痕跡をのこすものも見られるようになり、素材の貝殻に質の悪いものが混在する沖縄の状況に対応する。

同じ時期、イモガイ腕輪の着装数もピークとなる。現在の最着装例は、佐賀県吉野ヶ里で熟年女性が右腕に25 個、左腕輪に11 個のイモガイ腕輪をはめて甕棺に葬られていた事例である〔渋谷編 2016〕（図10-6～10⁽¹⁵⁾）。

ゴホウラやイモガイのこうした消費状況を出土貝輪数の変化で示すと図12-1 のようになる〔木下 2004〕。C 群の時期はグラフのⅢ期に対応し、この時期が弥生時代の貝輪消費のピークであることがわかる。

③ 貝輪粗加工品

C 群ならびにc 群の時期の特徴はゴホウラ立岩型貝輪の登場であり、沖縄には立岩型貝輪に対応

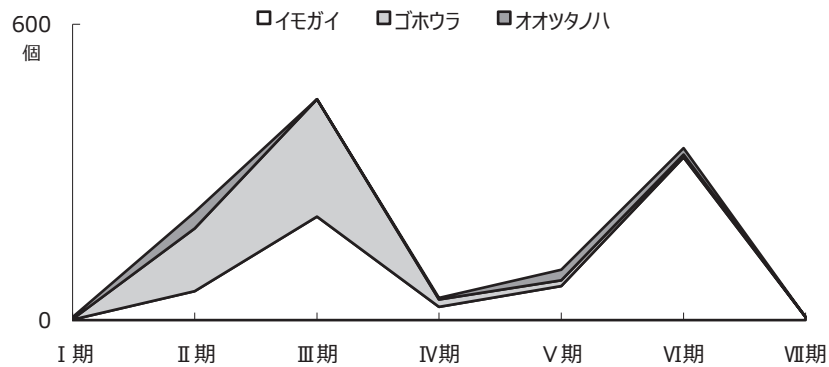


図 12-1 琉球列島産大型巻貝の出土数の変化（種子島を除く西日本，総数1175）

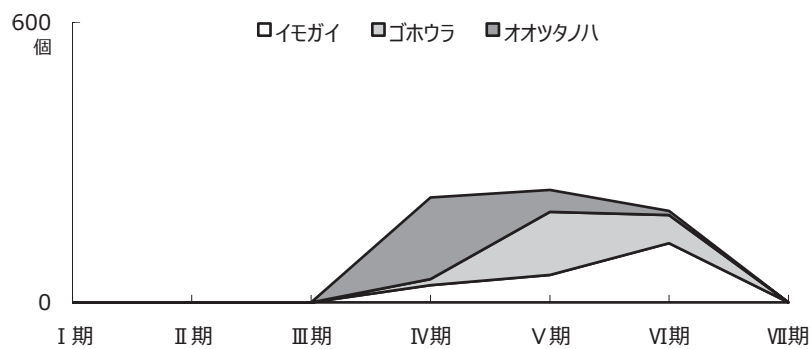


図 12-2 琉球列島産大型巻貝の出土数の変化（種子島，総数662）

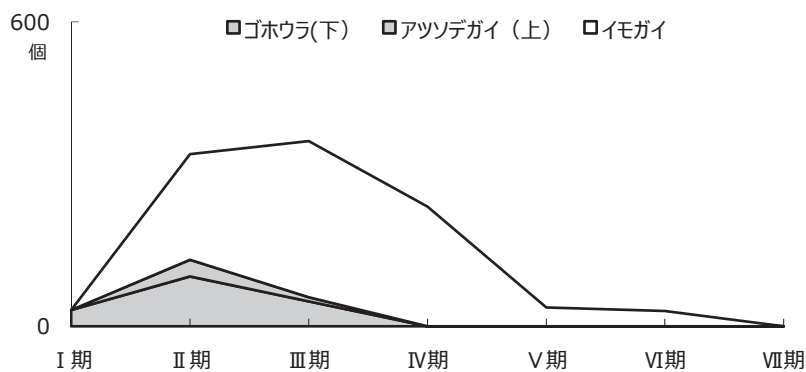


図 12-3 沖縄諸島の貝殻集積の貝殻数の変化（総数1039）

図 12 琉球列島産貝殻の消費数と産地残存数の動向 [木下 2004]

I期：弥生前期後半以前，II期：弥生前期末～中期前半，III期：弥生中期中頃～後期
IV期：弥生終末期～古墳前期，V期：古墳中期，VI期：古墳後期～終末期，VII期：律令期

する粗加工品が登場する。それは立岩型の特徴である角張った部分をのこすために、ゴホウラの螺旋塔に接着する上唇部分を三角形に注意深く残した粗加工品である（図 11-1）。図には立岩型の初期の貝輪を示したが（図 11-2）、消費地の変化に粗加工品がよく対応していることが理解される。この時期の沖縄にも在地的な立岩型貝輪がみられる（図 11-3）。

図 12-3 は、貝殻集積の時期と同じ包含層の主要な土器型式によって推定し、その貝殻数の推移を示したグラフである。データは 2003 年のもので、集積の厳密な所属時期は見直される可能性もあるが、沖縄に残された貝殻のおおよその動向を掴むことはできる。C 群の時期はグラフのⅢ期に対応する。先に示した図 12-1 のように、この時期のゴホウラ消費数は弥生時代のピークを示すが、図 12-3 では沖縄に残されるゴホウラ数は前の時期より少なくなっている。もとより貝殻集積の存在は交易からもれた輸出品や予備品を反映するものなので、これらが沖縄で減少するのは、その多くが製品化され交易されたことを物語っているだろう。この時期ゴホウラ資源に減少の兆しのあることを知る沖縄の人々は、増大する貝殻需要に対応するために、やや質の悪い貝殻であっても粗加工品にしたて、これらを効率よく輸出したのであろうか。沖縄の遺跡で立岩型貝輪の粗加工品がほとんどみられないことは、このように考えると説明がつく。

一方、イモガイの集積数は消費数に対応して増え、この時期にピークを迎える。イモガイはゴホウラと異なり生貝を比較的容易に採取することができるため、消費の伸びに従って採取数も増え、相応数の在庫が生じたのだろうか。

4. D 群の時期

① 貝殻産地

図 3 No.32～42 の 11 例が D 群（確率分布曲線のピークが cal AD1 をまたぐもの）に対応する。No.32～34（伊礼原遺跡 SS01）は貝殻 20 個（ゴホウラ 6、イモガイ類 13、マガキガイ 1）による集積である。砂層を浅く掘り込んでおり、底部から島外産の大壺（弥生中期）がみつかっている。出土したゴホウラ 6 点のうち 3 点は「背面のヘビガイが削り取られているようで、移出用にクリーニングした可能性が高い」〔島袋編 2014：p.31〕と報告されている（写真 3- 上の写真の下段のゴホウラ）。集積の近くでは、付着したヘビガイが除去された痕跡を残す立岩型貝輪の粗加工品が出土しており、当時の輸出品の状況を伝えている（写真 3- 下）。No.42（片江原）はゴホウラ 5 個の集積である。このうちの 1 個はゴカイやキクスズメガイ等による付着痕跡の激しい老貝であり、他の 4 個は貝殻の厚みのない若い貝である。この時期の貝塚人たちが貝殻確保にかなり苦心していた状況が窺える。

一方イモガイはこうした採取の窮状を窺わせない。No.35～37、No.38～39 は同じ遺跡（新城下原第二遺跡）の異なるイモガイ集積であるが、較正年代は驚くほどよく揃っている。

② 貝輪消費地

紀元前後の時期に対応するのは d 期である。図 4 では⑩が対応し、甕棺型式では中期末である。紀元前後の時期は日常の弥生土器編年では後期初頭をも含むので、d 期を中期末から後期初頭とし

て検討しよう。弥生中期末になると北部九州でのゴホウラ・イモガイ消費数は急に減少する。現在この時期に知られる貝輪着装例は、ゴホウラ1例、アツソデガイ1例、イモガイ3例、貝輪総数13点にすぎない [木下 2019]。ゴホウラ類・イモガイ類腕輪の消費の激減は、この時期に始まる消費地側の社会状況等の変化に連動する現象とみられるが、貝殻生産地でもゴホウラについては提供の限界に近づいていた感がある。弥生時代における琉球列島産の大型巻貝の消費は、この時期をもって一旦収束する。

③ 貝輪粗加工品

消費地での需要の急激な落ち込みによって、粗加工品の生産も同時に衰退し、弥生人の貝輪の流行に合わせた粗加工品の形の変化もここで止まることになる。交易が収束してゆく中、最終目的地で受け取り手を無くした一部の貝輪粗加工品は、貝殻運搬人たちの故地である薩摩半島や八代海の手辺に留め置かれたようである。弥生時代後期後葉以降、立岩型貝輪粗加工品とイモガイ腕輪粗加工品は、その形態を保ったまま、新たに加わったオオツタノハとともに貝殻運搬者たち自身によって消費され、続く古墳時代への消費を導くことになる [木下 1996, 2019]。

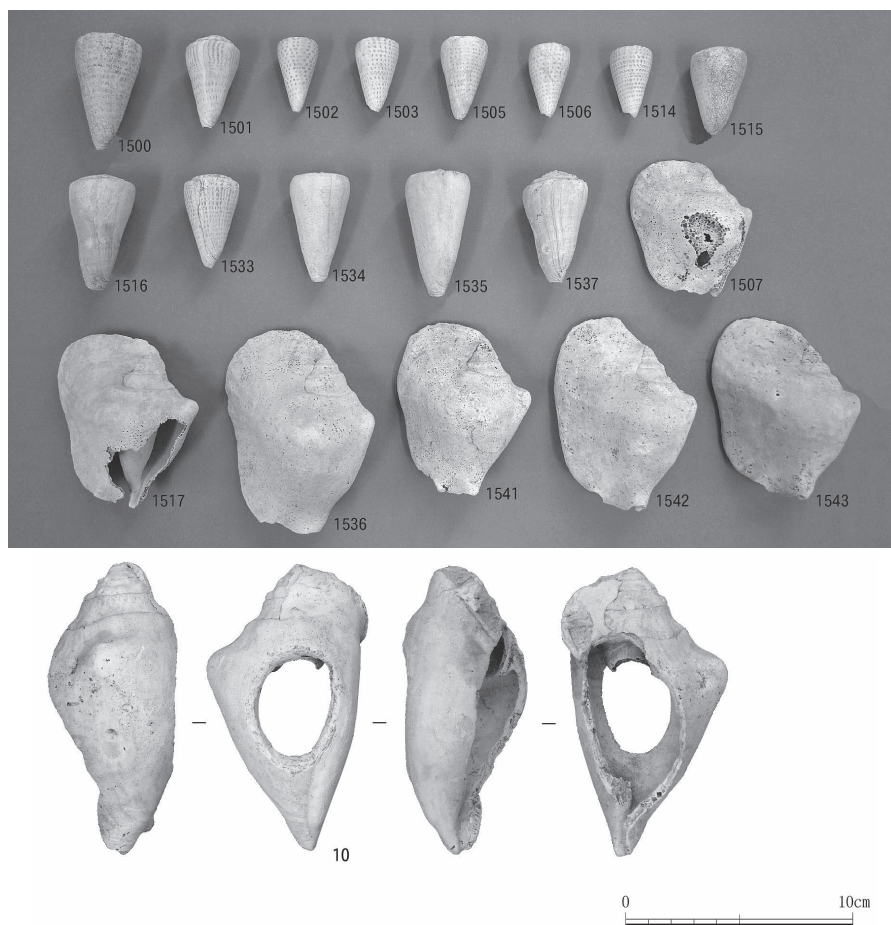


写真3 伊礼原遺跡SS01の貝殻、立岩型貝輪粗加工品

[島袋編 2014：図版10、図版61引用]

5. E 群の時期

① 貝殻産地

図 3 No.43～50 の 8 例が E 群（確率分布曲線のピークが cal AD301～500 にあるもの）に対応する。この時期は、図 12-1 のⅣ期とⅤ期にあたり交易量が激減する一方で、貝交易の消費地が近畿から再び九州へと短い時間に変転し、さらに少し前の時期に始まっていた種子島の貝殻消費の本格化の時期と併行する（図 12-2）。

No.43～45（具志原貝塚Ⅴ層）は 47 個からなる貝殻集積で、3 例がよく揃った数値を示している。この遺跡では同じ層（Ⅴ層）で種子島広田遺跡の下層と共通するヤコウガイ匙がみられ、上のⅣ層で広田遺跡下層タイプ（新段階）の貝符が出土し、下のⅨ層で広田遺跡下層に多いオオツタノハ腕輪⁽¹⁶⁾が出土するなど、種子島との関係が明確である〔安里ほか⁽¹⁶⁾〕。

No.46～47（伊礼原 D 遺跡Ⅴ b 層：4317SS）はイモガイ 35 個からなる集積で、同じ包含層からは彫刻された柄をもつヤコウガイ匙、オオツタノハ腕輪が出土しており、やはり広田遺跡との共通性がみられる。ここでは貝殻集積に大当原式土器が伴い、貝殻の較正年代はこれまで想定されてきた絶対年代と調和的である。

No. 48～50（津堅貝塚Ⅶ層）はイモガイ 13 個の集積の値である。津堅貝塚ではⅦ層からⅣ層までイモガイだけの集積がみられ、継続的な交易活動が窺える。土器は大当原式からアカジャンガー式で、土器付着炭化物による較正年代が得られている（Ⅳ層：cal AD430～620、Ⅵ層：cal AD240～440）。Ⅶ層のイモガイの年代もこれらと矛盾しない値を示している。Ⅵ層で広田下層タイプの貝符、Ⅶ層で広田遺跡下層に共通するマクラガイ珠がでており、種子島広田遺跡との関係が示唆される。

この時期にゴホウラの集積はみられないが、輸出を意識したゴホウラ貝殻の生産は継続していたようである。No.46～47（伊礼原 D 遺跡Ⅴ b 層）のイモガイ集積と同じ層で、ゴホウラ貝輪 2 個とまるごとのゴホウラ貝殻 11 個が出土している。後者に混在する「背面に多くのヘビガイが付着した貝殻」では、小さな付着物が逐一除去され、その後背面が研磨されているという〔山城ほか 2013：p.143〕。一方、この時期ゴホウラの生息数には回復の兆しが見え始める。平安山原 B・C 遺跡では良質の粗加工品等が多くみられるからである〔島袋編 2016〕。

② 貝輪・貝釧消費地

貝殻集積が示す 4 世紀から 5 世紀、貝交易の主要な相手は北部九州人から近畿地方の古墳人に変わっており、交易内容は、ヤマト王権によって選別された貝殻が限定的に消費される状況に変化していた。交易品は丸ごとの良質なゴホウラが厳選され、大型イモガイのほかに、スイズガイ、サラサバテイラ、テングガイが運ばれた。近畿における琉球列島産の貝殻消費が収束すると、5 世紀前半に今度は九州でイモガイ腕輪が、続いて 5 世紀後半にゴホウラ腕輪の消費が復活し、九州・沖縄間の交易が再開される〔木下 1996, 2017, 中村 2008〕。しかし沖縄ではこれらの交易を示す痕跡は不明瞭である。

一方、種子島の南の広田集落においては、すでに弥生時代終末期にオオツタノハと大型イモガイ

類の消費が新たに始まっていた。E群の時期はこれにゴホウラの消費が加わる時期であり、広田人が沖縄との関係を深める時期にあたる〔木下2003〕。

広田人のイモガイ消費の特色は、貝殻全体を使う点にある。体層は専ら貝符に使われ、螺塔は円盤状に切り離されて別の装身具に使われた〔山野2014〕。貝殻のどの部位をどう使うかは消費地で判断されたであろうから、イモガイは貝殻まるごと交易された可能性が高い。大型イモガイは広田人にとって自らの装身文化に不可欠な、おそらく最重要の素材であり、その消費は以後7世紀まで続く。沖縄にのこるこの時期の多くのイモガイ集積はこうした広田人の消費に対応している。

E群の時期の後半に登場する広田人のゴホウラ腕輪は幅の広い背面貝輪で、良質な貝殻も多いが、質の悪い貝殻もしばしば混在する。伊礼原D遺跡でみられたようなヘビガイ等の付着した貝殻も広田人によって消費されたとみられる。

③ 貝輪・貝釧粗加工品

広田遺跡のゴホウラ腕輪に少し遅れて九州に登場するゴホウラ腕輪は広田遺跡の貝輪とよく似た形のものであった。九州でのゴホウラ腕輪の流行は広田遺跡の消費と無関係でなかったのである〔山野2012, 中村2013〕。一方この時期に対応する大当原式期（5世紀頃）の沖縄では、ゴホウラ背面貝輪の粗加工品が広田人特有の貝符等とともに出土し、二つの地域の密接な関係を伝えている（平敷屋トウバル遺跡、平安山原B・C遺跡例）。ゴホウラ背面貝輪の粗加工品がこの時期の交易品の主流であった。注目すべきは、この粗加工品に、ゴホウラ貝殻の「質」と「研磨仕上げの程度」において明らかに精粗の区別が存在している点である。これを消費地のゴホウラ腕輪からみると、広田遺跡のゴホウラ腕輪にはしばしば粗質なもの⁽¹⁷⁾が混在するのに対し、九州の古墳に伴う貝釧にはこうしたものがほとんどない。交易品における精粗の格差と消費地の対応はこの時期の際だった特徴である〔木下2014〕。

6. F群の時期

図3 No.51（中川原遺跡）のイモガイ集積5個の内の1例が、F群（確率分布曲線のピークがcal AD501以降のもの）に対応する。この時期には広田遺跡でイモガイとゴホウラの消費が継続する一方で、6世紀後半以後はイモガイを嵌入した馬具が全国的に流行し、中・大型のイモガイが広く消費されて、貝殻消費は新たなピークを迎える。この時期については、年代測定の事例の増加をまって検討しよう。

V 結語－まとめと今後に向けて－

今回、沖縄の貝殻集積について実施した炭素14年代測定は、現在確認されている貝殻集積のうち、遺跡では40%、遺構では18%にあたる。得られた年代値にはいくつかのまとまりが認められたので、これを6群（A群～F群）に分けて検討を行った。分類の妥当性については、次年度の調査で例数をふやした後、改めて検討することにし、以下に今回明らかになったことをまとめ、次の調査に繋げたい。

- A 群（確率分布曲線のピークが 501 cal BC 以前にあるもの、以下同じ）：西北九州沿岸部の支石墓人によって沖縄諸島と九州間の貝交易が始まる時期で、弥生前期前葉から前期中葉の時期に対応する。弥生人の琉球列島への接触は、種子島・吐噶喇列島に多いオオツタノハの使用を介して始まり、その後奄美・沖縄に多いゴホウラ、イモガイの消費に至る。この時期に対応する産地遺跡は、沖縄本島東中国海側の嘉門貝塚 A と同 B（浦添市）である。沖縄ではすでにイモガイ集積が存在し、貝輪用に加工されたゴホウラの素材も登場しているので、交易の開始期は今回の貝殻の年代よりさらに遡る可能性がある。
- B 群（500 ～ 201 cal BC）：北部九州平野部の弥生人によるゴホウラ類・イモガイ類の貝殻消費が始まり、複数種類の貝輪に対応した形のゴホウラ・イモガイ腕輪粗加工品が沖縄から輸出される時期である。弥生前期後葉から中期中葉に対応する。この時期の貝殻産地は、沖縄本島の小堀原遺跡、伊礼原遺跡（ともに北谷町）、木綿原遺跡（読谷村）、平敷屋トウバル遺跡・宇堅貝塚（ともにうるま市）である。貝殻産地が沖縄本島の東中国海側だけでなく太平洋側に及んでいる点に注意される。粗加工品とは別に、在地タイプの諸岡型ゴホウラ腕輪が沖縄に登場する。
- C 群（200 ～ 1 cal BC）：弥生社会のゴホウラ類・イモガイ類の消費数が最大になり、沖縄でのゴホウラ確保に行き詰まりの兆候が見え始める時期であるが、貝殻の質を低下させながらも、ゴホウラは効率よく交易された。弥生中期後半に対応する。貝殻産地は沖縄本島の浦添市、北谷町、読谷村、うるま市の各遺跡で、いずれも B 群の時期から継続している。沖縄で、在地タイプの立岩型ゴホウラ腕輪が作られる。
- D 群（1 cal BC/cal AD1 をまたぐ）：九州の貝殻需要が衰退し貝交易が収束する時期で、弥生中期末から後期初頭に対応する。沖縄では、ゴホウラ立岩型貝輪の粗加工品とイモガイヨコ型貝輪の粗加工品が、型式を変化させずに一定期間継続して生産される。貝殻産地では、浦添市の遺跡が消えて、東の宜野湾市に新たな遺跡が始まる（新城下原第二遺跡）ことを除くと、北谷町、うるま市、読谷村の遺跡はいずれも C 群の時期から継続する。
- E 群（cal AD301 ～ cal AD500）：消費地が短期間のうちにヤマト王権の畿内から九州へと移り、一方で種子島広田集落において沖縄との交易関係が深まる時期である。古墳時代前期から中期に対応する。この時期のゴホウラ・イモガイ貝殻は、九州の古墳社会と種子島の在地社会で別個に消費された。前者では良質の貝殻がまるごとまたは粗加工品として交易され、後者ではイモガイ類・ゴホウラ類が流通した。貝殻産地では北谷町とうるま市の遺跡が継続する一方で、伊江島が新たな産地として登場し、貝殻消費地の変化が産地の変化と連動している様子を窺うことができる。
- F 群（cal AD501 以降）：貝交易の第二のピークに対応するが、測定値の例数が少ないため、例数の増加を待つて検討したい。

この中で、D 群と E 群の間約 200 年間は今回データがない。この時期は弥生後期中頃から古墳時代初頭に相当し、弥生の貝交易と古墳・種子島の貝交易をつなぐ谷間の時期にあたる。貝交易では主要な消費地が大きく変わる時期である。資料の不在はこうした事実を反映しているのかもしれない。さらに B 群と C 群の間にも小さな切れ目がある。この時期は消費の中心が福岡平野から佐賀・筑紫野・筑後・筑豊に移り、交易ルートや貝殻運搬にかかる人々にも変化があったと考えられる時

期である。こうした変化が反映されている空隙であれば、小さな切れ目でも大事な意味をもつだろう。

A群は貝交易の開始期を示すものでとくに重要である。今回は試験的な意味もありイモガイ集積を中心に年代測定をおこなったが、実はイモガイ腕輪が消費地に登場するのはゴホウラ腕輪にやや遅れる。同時期のゴホウラ集積で測定を行い、貝輪素材を含めて開始期の状況を追究する必要があるだろう。

今回年代測定をした集積では、同一集積内の貝殻の年代がよく揃う事例と、新旧の2期に別れる集積があった。後者については、一定の時間幅をもって使用された出土状況を示すものがあり、こうした事例については、可能であれば測定数をふやし、貝殻集積についてさらなる理解に繋げたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、安座間充氏、岸本義彦氏、坂本稔氏、島袋春美氏、新里亮人氏、新里貴之氏、瀧上舞氏、藤尾慎一郎氏、宮城弘樹氏、山野ケン陽次郎氏には多くの教示を賜りました。資料をご提供くださった浦添市教育委員会、うるま市教育委員会、沖縄県埋蔵文化財センター、北谷町教育委員会、読谷村教育委員会の関係各位に感謝申し上げます。

註

(1)——ゴホウラ *Strombus latissimus*; *Strombus* (*Tricornis*) *latissimus* Linnae, アツソデガイ *Strombus thersites*; *Strombus* (*Tricornis*) *thersites* Swainson はいずれもスイショウガイ科の巻貝で、殻長はそれぞれ18cm前後、14cm前後をはかり、貝殻の分厚いことが特徴である。アンボンクロザメ *Conus litteratus*; *Conus* (*Lithoconus*) *litteratus* Linnaeus, クロフモドキ *Conus leopardas*; *Conus* (*Lithoconus*) *leopardas* Hwass はイモガイ科の大型巻貝で、殻長は12cm前後をはかり、クロフモドキの方がやや大きい傾向がある。体層が分厚いことが特徴である。

(2)——貝塚時代は沖縄諸島の先史時代の時代区分名で紀元前7000年前後から11世紀までをさす。このうち紀元前500年前後以降を貝塚時代後期としている。

(3)——広田遺跡は種子島の東南にある弥生時代終末期から古墳時代後期にいたる埋葬遺跡である。埋葬された人々が奄美・沖縄地域の貝殻を素材にした多種類の装身具を身に着けていたことで知られる〔桑原編2003〕。

(4)——「貝輪粗加工品」とは貝輪の完成形に沿った形状の加工品をさし、「貝輪素材」とはそれ以前のより単純な加工段階のものをさす〔木下2017〕。

(5)——貝殻の試料の選択では、博物館等の展示で使う可能性の低い形状のものを、1基の貝殻集積で1点、出

土数の多い集積については2点を選択した。貝殻のサンプリングでは、最も新しく形成された部位、すなわちゴホウラでは外唇部の外側、イモガイでは殻口外側の一部を選んでドリルで穿孔し、それぞれ約50mgを採取した。測定された年代について海洋リザーバー効果の補正を行った。

(6)——浜屋原貝塚A地点(1977年報告、ゴホウラ4個)、木綿原遺跡(1978年報告、イモガイ7個)、ナガラ原西貝塚(1979年報告、イモガイ8個)、熱田第二貝塚(1979年報告、有孔ゴホウラ3個)

(7)——論文の分類ではこのほかにマガキガイの集積が分類されているが、類例がこれまでに本例のみなので、ここでは省略する。

(8)——貝塚時代後期前半の土器編年は以下のような型式で示される〔安座間2014、新里貴之ほか2014:p.311〕。

なかぼる
仲原式(新段階): 弥生時代前期前半併行期
あはれんうら
阿波連浦下層式: 弥生前期後半から同中期前半併行期
はまやばる
浜屋原式: 弥生中期中頃から同後期前半併行期
うふとうぼる
大当原式: 弥生後期後半から古墳時代中期併行期

(9)——「5枚の大きな板石を寄せ集め人骨上面に覆いかぶせるように置き重ね、板石の間に礫を配した墓葬である。」と説明される〔乗安1985:p.9〕。一枚の上石が複数枚の板石に置き換わっていること除くと、支石にあ

たる礫もあり、基本的な構造は支石墓と同じといえる。

(10)——オオツタノハの腕輪は弥生時代早期から前期において、支石墓をつくる人々に好まれた。宇久島松原遺跡では明治5年に発見された支石墓下の人骨にオオツタノハ腕輪が2箇伴っており〔小田1970〕、さらに1996年の発掘調査において支石墓に隣接する1号土壙墓において女性の両腕に2箇ずつのオオツタノハ腕輪が装着された状態で検出された〔川道編1997〕。弥生時代の九州に最初にもたらされた琉球列島の貝輪素材が種子島から吐噶喇列島に生息するオオツタノハであったことは、これらの地域に九州の縄文晩期から弥生前期の土器がみられることからほぼ確実である。

(11)——この素材がその後、腹面部分を除去されて貝輪粗加工品となったものが鹿児島県高橋貝塚、木綿原遺跡、古座間味貝塚等に知られる。

(12)——ゴホウラの幼貝や若い貝殻は、ゴホウ成貝とはほぼ同じ大きさで貝殻の厚さが薄い。このため子供用の小型の貝輪をゴホウラで作るのは困難であることから、弥生人はゴホウラより小型で分厚いアツソデガイを別途子供用の貝輪素材とした。

(13)——木綿原遺跡では、弥生土器の影響をうけたと考えられる在地産の壺が、「第1号箱式石棺墓の周辺より、10数点の破片として出土した」〔当間ほか1978：pp.40～41〕

(14)——イモガイによる腕輪は、体層を使ったタテ型と螺旋付近を使ったヨコ型の二つのタイプがある（図6-9・10）。前者は西北九州沿岸部で、後者は内陸平野部で好まれた。

(15)——SAJ2775の時期を、報告書では弥生時代中期末とする。

(16)——広田遺跡の層序は大きく上層と下層に別れ、葬法に明確な違いがある。副葬品については以下の特徴がある。

下層：前半はオオツタノハ腕輪が主体をなす。ヤコウガイ匙、下層タイプの貝符、マクラガイ玉等を伴う。なお下層は貝符の型式によって新旧2段階（古段階・新段階）に分けられ、後半の新段階にゴホウラ背面腕輪が登場する。

上層：ゴホウラ背面腕輪が主体をなす。イモガイ製の層タイプの貝符等を伴う。

広田人は、種子島近海でオオツタノハを、沖縄・奄美で大型イモガイ、ゴホウラを入手した可能性が高い。

(17)——中村友昭氏は、種子島で出土したゴホウラ貝輪を検討して、これが九州の古墳社会に向けられたものであったことを指摘した。古墳社会への交易品が種子島を介して届けられていた状況は、粗加工品の流通を考える上で重要である〔中村2019〕。

参考文献

- 安里嗣淳ほか1983：『伊江島阿良貝塚発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第48集。
- 安座間充2014：「貝塚時代後1期・沖縄諸島の土器動態」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』、琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第1集、六一書房、pp.157～172。
- 小田富士雄1970：「五島列島の弥生文化 総説篇」『長崎大学人類学考古学研究報告』第2号、長崎大学医学部解剖第二教室。
- 川道寛編1997：『宇久松原遺跡』宇久町文化財調査報告書第4集、宇久町教育委員会。
- 岸本義彦・島弘1985：「沖縄における貝の集積遺構－ゴホウラ・イモガイを中心に－」『紀要』第2号、沖縄県教育委員会文化課、pp.68～83。
- 神澤秀明・角田恒雄・安達登・篠田謙一2021：「佐賀県唐津市大友遺跡第5次調査出土弥生人骨の核DNA分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集、pp.385～393。
- 木下尚子1989：「南海産貝輪交易考」『生産と流通の考古学 横山浩一先生退官記念論文集』、横山浩一先生退官記念事業会、pp.203～249。
- 木下尚子1996：「古墳時代南島交易考」『考古学雑誌』81巻1号、日本考古学会、pp.1～81。
- 木下尚子2003：「貝製装身具からみた広田遺跡」『種子島広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県歴史資料センター黎明館、pp.329～366。
- 木下尚子2004：「南島と大和の貝交易」『考古資料大観12 貝塚後期文化』小学館、pp.250～254。
- 木下尚子2010：「アツソデガイの腕輪－弥生時代の小型貝輪考－」『先史学・考古学論究V』上巻、龍田考古会、pp.337～361。
- 木下尚子2017：「貝輪粗加工品の流通－弥生人貝交易再論－」『南島考古』第36号、沖縄考古学会、pp.143～160。

-
- 木下尚子2017:「金海大成洞91号墳出土のゴホウラ・イモガイ製品－貝装馬具とその位置付け－」『金海 大成洞古墳群』博物館学術叢書第19冊, pp.175～202.
- 木下尚子2019:「オオツタノハの再登場－弥生時代の新しい祭祀」『先史学・考古学論究Ⅶ』龍田考古会, pp.85～101.
- 久保弘文・黒住耐二1995:『生態/検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝』沖縄出版.
- 黒住耐二1994:「オオツタノハの供給地」『南島考古』No.14, 沖縄考古学会, pp.57～64.
- 黒住耐二2011:「琉球先史時代人とサンゴ礁資源－貝類を中心に－」『先史・原史時代の琉球列島～ヒトと景観～』, 六一書房, pp.87～107.
- 桑原久男編2003:『種子島広田遺跡』広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県歴史資料センター黎明館.
- 呉屋義勝・大城広江・宮城ゆりか1989:『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市文化財調査報告書第10集, 宜野湾市教育委員会.
- 茂和敏編2006:『安徳台遺跡』那珂川町文化財調査報告書第67集, 那珂川町教育委員会.
- 渋谷格編2016:『吉野ヶ里遺跡－弥生時代の墓地－』佐賀県文化財調査報告書第214集, 佐賀県教育委員会.
- 島袋春美1989:「南島から見た貝の交易－弥生時代を中心に－」『考古学ジャーナル』No.311, pp.9～13.
- 島袋春美編2014:『伊礼原遺跡(国指定外)・伊礼原A遺跡』北谷町文化財調査報告書第36集, 北谷町教育委員会.
- 島袋春美編2015:『平安山原B遺跡』北谷町文化財調査報告書第37集, 北谷町教育委員会.
- 新里貴之・伊藤慎二・宮城弘樹・新里亮人2014:「琉球先史・原史文化の考古学的画期」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』, 六一書房, pp.305～311.
- 田中良之2011:「AMS年代測定法の考古学への適用に関する諸問題」『AMS年代と考古学』, 学生社, pp.131～161.
- 當眞嗣一ほか1978:『沖縄県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書』読谷村文化財調査報告書第5集, 読谷村教育委員会.
- 當眞嗣一ほか1980:『久米島大原貝塚発掘調査報告』沖縄県文化財報告書第32集.
- 中村友昭2008:「岡崎18号墳2号地下式横穴墓出土の貝釧」『大隅申良 岡崎古墳群の研究』, 鹿児島大学総合研究博物館, pp.243～256.
- 中村友昭2013:「古墳築造域と琉球列島間におけるゴホウラ背面釧の流通について」『ナガラ原東貝塚の研究』平成21～24年度科学研究費補助金研究(A)研究成果報告書, pp.295～308.
- 中村友昭2019:「『南種子町一陣貝塚』のゴホウラ製腕輪」『中山清美と奄美学』, 奄美考古学会, pp.137～147.
- 乗安和二三編1985:『中ノ浜遺跡 第9次発掘調査概報』豊浦町教育委員会.
- 東中川忠美編1981:『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第1集, 呼子町郷土史研究会.
- 藤尾慎一郎・設楽博己2014:「土器型式編年表」『企画展示 弥生ってなに?』国立歴史民俗博物館, pp.12～13.
- 藤尾慎一郎・木下尚子・坂本稔・瀧上舞2020:「考古学データによるヤポネシアの歴史の解明－2018年度の成果」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集, pp.119～137.
- 藤尾慎一郎・坂本稔・瀧上舞2020:「福岡県那珂川市安徳台遺跡出土弥生中期人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集, pp.189～198.
- 松川章編1993:『嘉門貝塚B』浦添市文化財調査報告書第21集.
- 三原正三・宮本一夫・中村俊夫・小池裕子2003:「名古屋大学タンデロン加速器質量分析計による大友遺跡出土人骨の¹⁴C年代測定」『佐賀県大友遺跡Ⅱ－弥生墓地の発掘調査－』日本人および日本文化の起源に関する学際的研究 考古学資料30, pp.64～69.
- 宮本一夫2001:『佐賀県大友遺跡－弥生墓地の発掘調査－』日本人および日本文化の起源に関する学際的研究 考古学資料16.
- 宮本一夫2003:「大友支石墓の変遷」『佐賀県大友遺跡Ⅱ－弥生墓地の発掘調査－』日本人および日本文化の起源に関する学際的研究 考古学資料30, pp.52～59.
- 山崎純男1986:「腕輪素材の提供者－沖縄諸島の遺跡群」『図説 発掘が語る日本史』, 新人物往来社, pp.131～135.
- 山城安生・島袋春美編2013:『伊礼原D遺跡』北谷町文化財調査報告書第35集, 北谷町教育委員会.
- 山野ケン陽次郎2012:「種子島広田遺跡の再検討」『古代文化』第63巻第4号, 古代学協会, pp.6～26.
- 山野ケン陽次郎2014:「先史琉球列島における円盤状貝製品の研究」『Archaeology from the South II 新田栄治先生退職記念論文集』, pp.265～270.
-

図版出典等

- 図1-1・2：嘉門貝塚B〔松川編1993〕第12図をもとに作成
1-3：アンチの上貝塚〔盛本編2005〕第11～12図をもとに作成
1-4：小堀原遺跡〔東門編2009〕第22図をもとに一部変更
1-5・6：嘉門貝塚A〔松川編1993〕第11～12図をもとに一部変更
図6-1～2：大友遺跡〔東中川編1981〕Fig.52
3：同上 Fig.69をもとに作成
4：同上 Fig.27
6：中ノ浜遺跡〔乗安編1985〕第7図
7：同上 第11図の1と5
図7-1～3：大友遺跡〔東中川編1981〕Fig.55～59をもとに作成
4：同上 Fig.28-1,2
図9-1～5：嘉門貝塚B〔松川編1993〕第54図をもとに一部変更
図10-1～3：安徳台遺跡（茂編2006）第83図
4：同上第81図
5：同上第91図
6～7：吉野ヶ里（渋谷編2016）図209
8～9：同上図211

（熊本大学人文社会科学研究部）

（2019年12月2日受付，2020年4月9日審査終了）

Reconstruction of Neolithic Shell Trade Based on Radiocarbon Data from Shell Deposits in the Okinawa Islands, FY2018

KINOSHITA Naoko

In Neolithic sites in Okinawa islands, remains of large numbers of shells of *Strombus latissimus* and Conidae species are found. They were prepared for people from the Yayoi culture in Kyūshū. They sailed to Okinawa to trade and get shells, which were made into bracelets of religious function for shamans in Kyūshū. The shell trade lasted through the Yayoi and Kofun periods. In 2018, the project group selected 51 shells of 27 deposits in 16 sites in Okinawa in order to acquire radiocarbon dates. The dates covered the whole Yayoi period and most of the Kofun period. We added 16 radiocarbon dates previously gathered from bones of Yayoi people, some found with *Strombus* and Conidae bracelets on their hands in Northern Kyūshū. These bracelets must originally have been collected in sites from Okinawa. We compared ^{14}C data from both areas – Okinawa, the shell production place and North Kyūshū, the shell consumption area.

These 67 radiocarbon dates from shells and human bones were ordered chronologically and classified in 6 groups as follows. Group A date to the time before 501 cal BC, the starting period of shell trade, when Yayoi fishermen from Northwest Kyūshū came down to Okinawa to get shells for their own. Group B date from 500 to 201 cal BC, when agricultural people in Northern Kyūshū joined the shell trade and took the leading role by expanding consumption and making characteristic bracelets. In this context, Okinawa people started to make half-made shell bracelets in accordance. Group C date from 200 to 1 cal BC, when the amount of shell consumption reached a peak which caused a degradation in quality of *Strombus*. Group D covers the 200 years around between 100 cal BC and cal AD100, when shell consumption in Kyūshū suddenly decreased and the shell trade rapidly found an end. Group E dates from cal AD301 to 500, when the area of main shell consumption moved from Kyūshū to Yamato. On the other hand, the people of Tanegashima separately began to use Conidae for their ornaments during this period. At this time the situation and background of shell trade changed dramatically. Group F covers the time after cal AD501, but we have only one radiocarbon datum from this time up to now.

Neolithic shell trade was presented with concrete dates for the first time in this paper.

Key words: Shell deposits, Radiocarbon date, Okinawa Islands, Kyūshū, Shell trade, Shell-mound period, Yayoi period
